

(24-1) Kapilamacchavatthu 魚になったカピラの物語 334-337

Manujassāti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto kapilamaccham ārabbhā kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、カピラマツチャ(褐色の魚)について語られたものである。

過去物語——ソーダナとカピラ兄弟

昔、カッサパ世尊が般涅槃されたとき、良家の二人の兄弟が家を出て仏弟子たちのもとで出家した、ということである。兄はソーダナという名前で、弟はカピラという名前だった。彼らの母親はサーディニーといい、妹はターパナーといい、彼女たちも比丘尼たちのもとで出家した。

兄のソーダナは「内観の勤めを完成しよう」と五年間、阿闍梨と和尚のもとで過ごした後、阿羅漢に至る瞑想の主題をいただいて、森林に入って努力し、阿羅漢果に到達した。弟のカピラは〔先に〕聖典読誦の勤めを完成したいと望んで、三歳を習い覚えた。彼の学識によって信者の群れができ、信者の群れによって布施の品々を受けるようになった。彼は自分の博識に酔いしれて放漫になり、利得への渴望に心奪われ、あまりにも自分は賢いと慢心し、罪ではないことも「罪である」とし、罪であることも「罪ではない」と言った。彼はカッサパ世尊の聖なる教団を退廃させた。

兄のソーダナ長老はそのとき般涅槃した。カピラは自分の寿命が尽きたときに、阿鼻大地獄に再生した。彼の母も妹も彼と同じことをして、行い正しい比丘たちに怒り嘲って、カピラとおなじ地獄に再生した。

さてその当時、五百人の男たちが村の掠奪などをして放浪して生活していたが、地方の人々に追われて逃げるうちに森に入り、そこで何も抛り所が見つからないので、ある森林住の比丘を見て礼拝し、五戒を受けた。盗賊たちは死んで天界に再生した。盗賊の頭は神々の長になった。彼らは行ないに従って上へ下へと、〔カッサパ仏からゴータマ仏が世に出るまでの〕無仏の時代を天界で輪廻の生まれ変わりをしたのち、今のブツダが世に現れたとき、サーヴァッティー市の城門近くの、五百の家がある漁師の村に再生した。神々の長は漁師の長の家に生を享け、他の神々はそれぞれ別の家に生を享けた。こうして、これらの神々は同じ日に一斉に人間として生を享け、母親の胎内から生まれ出た。

漁師の長は、「この村で、他に赤子が今日生まれただろうか」と調べさせて、彼ら五百人が生まれたことを知り、「その兄らは、私の息子の友人になるだろう」と、全員に養育料を与えた。彼らは皆、砂遊びをする友だちになり、次第に成人に達した。彼らのうち、漁師の長の息子は、名声、榮譽ともに最高の男子となった。一方カピラは、無仏の時代を地獄で焼かれたのち、悪業の残滓のために、同じときに、アチラヴァッティー河に、体は黄金色だが口から臭い匂いのする魚になって再生した。

現在物語—悪臭のする黄金色の魚になったカピラ

ある日、彼ら友人たちは「魚を捕まえよう」と網を掴んで川面に投げた。すると、彼らの網の中にカピラの生まれ変わりのその魚が入った。彼ら友人たちは、その魚を桶に入れて王のもとへ行行った。王は黄金色の魚を見て「師はこの黄金色の魚の由来をご存知だろう」と考え、魚を運ばせて師のもとへ行行った。ところが、魚の口を開けた途端、ジェータヴァナ精舎全体にひどい悪臭が広がった。王は師に訊ねた。「尊師よ、どうしてこの魚は黄金色になったのですか。どうして口から悪臭がするのですか。」

「大王よ、これはカッサパ世尊の教団において、カピラという比丘でした。博識で大勢の弟子たちに囲まれていました。しかし、利得への執着に打ち負かされ、自分の言葉を受け入れない人々に怒り侮蔑し、かの世尊の教団を衰退させました。そのため阿鼻大地獄に再生し、悪業の結果の残りのために、今、魚になったのです。しかし、彼は長いあいだブツダの言葉を唱え、ブツダの称賛を語りました。その功德の力によって今、黄金色を得ましたが、比丘たちに怒り侮蔑したので、その悪業によって彼の口から悪臭が発せられるのです。

師は黄金色の魚にお訊ねになった。「あなたはカピラですか。」「尊師よ、そうです。私はカピラです。」「どこから来たのですか。」「阿鼻大地獄からです、尊師よ。」「あなたは、今、どこに行こうとしていますか。」「魚は「阿鼻大地獄です、尊師よ」と答えて、後悔の念に打ちひしがれて桶の中で頭ではねて打ち、その場で死んで地獄に再生した。群衆は恐怖を覚えて体中の毛が逆立った。

すると師は、そのとき居合わせた会衆の心の動きを観察されて、その場に相応しい法と説こうと、「正しい行、聖なる行、これを最上の富と言う」と、「スッタニパータ」の「カピラ経」〔18,2-6. Dhammacariyasuttam 法行経, 法の行ないの経〕を語られてから、次の詩句を唱えられた。

「334 油断して過ごす人の執着は、蔓草のようににはびこる、彼はあちらこちらと輪廻の生を漂う、果実を求めてさまよう森の猿のように。」「335 この世にしがみつくと、忌まわしい執着に支配される人、その人の悲しみは増大する、ピーラナ草(茅の一種)が繁茂するように。」「336 しかしこの世で乗り越えがたい忌まわしい執着を制する人、その人から悲しみは去り落ちる、蓮の葉から水の雫が落ちるように。」「337 あなたがたに私は告げる、ここに集ったあなたがたに。執着の根を掘り起こせ、香りある根を求めてピーラナ草を掘り起こすように。あなたがたの葦を激流が押し流すように、〔魔王〕マールが繰り返し破壊しないように。」と。

法話が終わったとき、五百人の漁師の息子たちは焦燥心を生じ、苦を終わらせることを求めて師のもとで出家した。そしてまもなく苦を終わらせ、師とともに、不動の境地を成就した法の楽しみを、唯一の楽しみとするようになった。

334. Manujassa pamattacārino, tanhā vaddhati māluvā viya; So plavatī [plavati (sī. pī.), palavetī (ka.), uplavati (?)] hurā huram, phalamicchamva vanasmi vānaro.

334. [気づきを]怠るままに歩む人間の、渴愛[の思い]は増え行く――蔓草が[生い茂る]ように。彼は、あの[世]からあの[世]へと浮きただよう(輪廻する)――猿が、林のなかで果実を求めるように。

No.202 (2011年12月) 覚者は遺言をしない 不放逸は最期の言葉 Diligence consummates Buddhist practice.

334. Manujassa pamattacārino Tanhā vaddhati māluvā viya So plavatī hurā huram Phalamicchamva vanasmi vānaro

335. Yam esā sahate jammī Tanhā loke visattikā Sokā tassa pavaddhanti Abhivatthamva bīranam

336. Yo cetam sahate jammim Tanham loke duraccayam Sokā tamhā papatanti Udabinduva pokkharā

337. Tam vo vadāmi bhaddam vo yāvantettha samāgatā Tanhāya mūlam khanatha Usīratthova bīranam Mā vo nalamva sotova Māro bhañji punappunam

334. 放逸(タンハー)は薦の如くにからまりて、木の実求める林中の、猿さながらに今世後世、あちこち漂い流れ行く

335. 世にも卑しき渴愛の、うづきに負けて屈すれば、彼の憂いの増すことは、あたかも雨後のピーラナ草

336. 世にも卑しき渴愛の、打ち克ち難きに打克てば、憂いけがれの落つこと、花蓮葉(はなはちすば)の露の玉

337 我れおんみらにいざ説かん、幸多くあれこの会衆(えしゅう)、香根(ウシーラ)求めピーラナを、掘るが如くに渴愛を、その根元から掘り起こせ、流水 芦をしだくごと、魔神(マーラ)しばしば おんみらを、打しだくことなきように 訳: 江原通子

放逸で生きる人々の心の中に、渴愛が薦のように増えます。Māluvā (薦) という蔓植物は、巨大な樹木に宿る。みるみるうちに成長して宿った樹の栄養分を吸い尽くし、その樹を倒すのです。巨大な樹木とは心のこと、薦とは渴愛のことです。貪瞋痴の衝動で生きる人の心は、実を求めて枝から枝へ飛び回る猿のように安定しないのです。(334偈)

「欲・渴愛は、たいしたことではない。欲があってもそれほど危険ではない」と思って貪瞋痴を軽く見る人は、苦しみを徐々に増やす。人にとっては断ちがたいと思われる渴愛を断つ人は、一切の苦しみから解放される。その人々は、この世を悩ませている生老病死の苦、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五取蘊苦に悩まされることがない。苦しきは、蓮の葉に落ちた一滴の水のように、その人の心から落ちるのです。(335、336偈)

ですから不放逸によって渴愛を根こそぎに取り除くのが良いことだと、貴方がたに告げます。Usīra という香根が欲しい人は、その上に繁茂している bīrana という草を根こそぎに取らなくてはならないように。川の両岸には葎(葦)・真菰などの植物が元気に育っている。しかし洪水が来るたびにすべて流されてしまう。人間も何事もない時は家族・財産・健康などに執着して喜んで生きている。しかし、生老病死という洪水、経済不振・地震・津波などの自然災害という洪水に遭ったら、今までの幸福な気分は一欠片も残さずに奪われ、苦しみのどん底に陥ってしまうのです。(337偈)

お釈迦様は偈の終わりで、自然の流れを洪水にたとえます。川岸に元気に育っているが、洪水が来るたびに倒れて流されてしまう葎(葦)・真菰などを、人々の家族・財産・健康などへの執着・渴愛にたとえて戒めているのです。私たちは幸福を築くために「放逸」を励んでいます。それは激流の中でもがくような虚しい努力に過ぎないのです。「不放逸」を励みましょう。

マヌジャッサ	パマッタチャーリノー	タンハー	ワツダティ	マールワー	ヴィヤ
Manujassa	pamattacārino,	tanhā	vaddhati	māluvā	viya;
人間の、	[気づきを]怠るままに歩む	渴愛[の思い]は	増え行く	蔓草が	[生い茂る]ように。

Manujassa/manuja(m.sg.gen)[manu-ja]人,摩奴所生者 ja←-ja(a)suffix[<jan. cf. janati] 生ぜる pamattacārino=pamatta/pamatta(a 有持)[pamajjati <mad の pp]放逸なる,放縱の,我儘の-cārin 放逸行者+cārino/cārin:-cārin(a.m.sg.gen)[cāra -in]行ずる,実践する,行者, tanhā/tanhā(f.sg.nom)[Sk.trṣṇā.cf.tasānā]渴愛,愛,愛欲 vaddhati/vaddhati(v.pr.3sg)[vrdh]増大する,増する,生長する māluvā/māluvā(f.sg.nom)[cf.BSk.mālu]蔓草,葛,かずら viya/viya: ①(adv)[BSk. 〃, v'iva(va iva)>viya] ...の如く[iva,va ともする]: ②[疑問的に使用]na viya maññe 私は...でないと思う;

ソー	プラワティ	フラーフラン	パラミツチャンワ	ワナスミ	ワーナロー
So	plavatī	hurāhuram,	phalamicchamva	vanasmi	vānaro.
彼は、	浮きただよう(輪廻する)	あの[世]からあの[世]へと	果実を求めるように。	林のなかで	猿が、

So/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,その,彼女 plavatī/pilavati:plavati,palavati(v.pr.3sg)[plu cf.Sk.plavati]浮く,漂う,泳ぐ hurā/huram(adv) 他界に,他世に idha vā huram vā 此世でまたは他世で,今世後世で hurāhuram 此世他世で,あちこちの世界に huram/, phalamicchamva=phalam/phala: ①(n.sg.acc)[〃]果,果実,結果②(m)切先,剣尖③(n)鞞丸こうがん④(m)[=pala]重さの量 +iccham/icchanta(a.m.sg.nom)←icchati(v.ppr)[〃 is]欲す,欲求す,求む+iva/ vanasmi/vana(n.sg.loc)森林,欲林,欲望 vānaro/vānara(m.sg.nom)[<vana]猿。

335. Yam esā sahate jammī, tanhā loke visattikā; Sokā tassa pavaḍḍhanti, abhivaṭṭhamva [abhivaḍḍhamva (syā.), abhivaṭṭamva (pī.), abhivuddhamva (ka.)] bīraṇaṃ.

335. 渴愛が、世における執着が、この卑しむべきものが、彼を打ち負かすなら、彼の、諸々の憂いは増え行く― 雨を得たビーラナ [草] のように。

ヤン エーサー サハテー ジャンミー タンハー ローケー ヴィサッティカー

Yam esā sahate jammī, tanhā loke visattikā;  
彼を この 打ち負かすなら、 卑しむべきものが、 渴愛が、 世における 執着が、

Yam/ya(関代 m.sg.acc)[Sk.yah]~である人、~であるもの **esā**/eta,etad(pron.a.f.sg.nom)これ **sahate**/sahati(v.pr 反照態 3sg)[sah]征服す,打勝つ,耐える,忍耐す:できる,可能である **jammī**/jammī(f.sg.nom)←jamma(a)[Sk.jālma]卑しき,野卑の(f)jammī, **tanhā**/tanhā(f.sg.nom)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲 **loke**/loka(m.sg.loc)世,世間,世界 **visattikā**/visattikā(f.sg.nom)[visatta-ika]執着,愛着,縛着(渴愛) ←visatta(a)[visajjati の pp]執着せる,もつれた←vissajjati(v)[vi-sj]捨てる,やる,答える vissajjiya 捨て与えらるべき;

ソーカー タッサ パワッディンティ アビワッタンワ ビーラナン

Sokā tassa pavaḍḍhanti, abhivaṭṭhamva bīraṇaṃ.  
諸々の憂いは 彼の、 増え行く 雨を得た ビーラナ [草] のように。

Sokā/soka(m.pl.nom)愁,憂,うれい **tassa**/ta(人指示代 m.sg.gen)彼,その,彼女 **pavaḍḍhanti**/pavaḍḍhati(v.pr.3pl)[pa-vṛdh]増大する,生長する, **abhivaṭṭhamva**=abhivaṭṭham/abhivaṭṭa,abhivutṭha(a.n.sg.nom)←abhivassati(v.pp)[abhi-vassati]雨降る,注ぐ+iva/**bīraṇaṃ**/bīraṇa(m.n.sg.nom)[cf.Sk.vīraṇa]毘羅那,香草。

336. Yo cetam sahate jammim, tanham loke duraccayam; Sokā tamhā papatanti, udabinduva pokkharā.

336. しかしながら、渴愛を、世における超え難きものを、この卑しむべきものを、彼が打ち負かすなら、彼から、諸々の憂いは落ち行く― 蓮 [の葉] から、水の滴が [落ちる] ように。

ヨー チェータン サハテー ジャンミン タンハン ローケー ドウラツチャヤン

Yo cetam sahate jammim, tanham loke duraccayam;  
彼が しかしながら、 この 打ち負かすなら、 卑しむべきものを、 渴愛を 世における 超え難きものを、

Yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの **cetam**=ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして +**etam**/eta,etad(pron.a.f.sg.acc)これ **sahate**/sahati(v.pr 反照態 3sg)[sah]征服す,打勝つ,耐える,忍耐す:できる,可能である **jammim**/jammī(f.sg.acc)←jamma(a)[Sk.jālma]卑しき,野卑の(f)jammī, **tanham**/tanhā(f.sg.acc)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲 **loke**/loka(m.sg.loc)世,世間,世界 **duraccayam**/duraccaya(a.f.sg.acc)[du-accaya]越え難き,征服し難き←accaya(m)[Sk.atyaya<ati-]:①死去,経過(adv)すぎてから,死後②超越,征服 duraccaya 打ち勝ち難き③罪,過失,罪過;

ソーカー タンハー パパタンティ ウダビンドウ ポッカラー

Sokā tamhā papatanti, udabinduva pokkharā.  
諸々の憂いは 彼から、 落ち行く 水の滴が [落ちる] ように。 蓮 [の葉] から、

Sokā/soka(m.pl.nom)愁,憂,うれい **tamhā**/tamhā:=tasmā それより,それ故に←tasmā(a 代的 m.sg.abl)[ta の abl]それより,彼より,それ故に **papatanti**/papatati(v.pr.3pl)[pa-pat]落ちる,倒れる,落ちこむ, **udabinduva**=uda/uda:①(indecl)或は②(n 依属)=udaka 水-bindu 水滴+bindu/bindu(m.sg.nom)水滴,点滴,点;簡潔の+iva/ **pokkharā**/pokkhara(n.sg.abl)[cf.Sk.puṣkara]蓮葉,蓮,楽器の一種。

337. Tam vo vadāmi bhaddam vo, yāvantettha samāgatā; Tanhāya mūlam khaṇatha, usīrathova bīraṇaṃ; Mā vo naḷamva sotova, māro bhañji punappunam.

337. [わたしは] それを、あなたたちに説くであろう。あなたたちに、幸せ [有れ] ― ここにおいて集いあつまった、そのかぎりの者たちは。渴愛の根を掘り崩せ― ウシーラ (ビーラナ草の根・香料として使う) [の採取] を義 (目的) とする者が、ビーラナ [草] を [掘る] ように。悪魔が、繰り返し、あなたたちを、まさしく、流れが葦を [打ちひしぐ] ように、打ち砕くことがあってはならない。

タン ウォー ワダーミ バッダン ウォー ヤーワンテッタ サマーガター

Tam vo vadāmi bhaddam vo, yāvantettha samāgatā;  
それを、あなたたちに説くであろう。幸せ[有れ] あなたたちに、そのかぎりの者たちは。ここにおいて集いあつまった、

**Tam**/ta(人指示代 n.sg.acc)彼,その,彼女 **vo**/tvam:tumha(人代.pl.dat)汝,あなた **vadāmi**/vadati(v.pr.1sg) // vad]言う,説く,告げる pres.vadeti=vadati **bhaddam**/bhadda:bhadra(a.n.m.sg.nom)[Sk.bhadra]賢き,吉祥の,吉瑞;牛;矢の一種.bhaddam te 女に幸福あれ **vo**/tvam:tumha(人代.pl.gen)汝,あなた, **yāvantettha**=yāvanti/yāvanti(pron.rel) // 所のそれだけ+**ettha**/ettha(adv)[Sk.atra] ここに. **samāgatā**/samāgata(a.m.pl.nom)来集せる←samāgacchati(v.pp)[sam-ā-gam]来集す,到来す,会合す;

タンハーヤ ムーラン カナタ ウスィーラットーワ ビーラナン

Tanhāya mūlam khaṇatha, usīrathova bīraṇaṃ;  
渴愛の 根を 掘り崩せ ウシーラを義(目的)とする者が、 ように。 ビーラナ [草] を [掘る]

**Tanhāya**/tanhā(f.sg.gen)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲 **mūlam**/mūla(n.sg.acc)根,根本,元金,代価 **khaṇatha**/khaṇati:①(v.imper.2pl)[Sk.khanati khan]掘る,掘り出す②(v)[Sk.kṣaṇoti kṣan,kṣaṇ]破壊す,害す,傷つける,尽くす pp.khata, **usīrathova**=usīra/usīra(m.n 有持)[Sk.usīra]ビーラナ草の根,香根+**attho**/attha:①(m.n.m.sg.nom)[Sk.artha]義,利益,道理,意味,必要,裁判②(n)[Sk.asta]attham gacchati[日が西に]没す,帰る+iva/ **bīraṇaṃ**/bīraṇa(m.n.sg.nom)[cf.Sk.vīraṇa]毘羅那,香草;

マー ウォー ナランワ ソートーワ マーロー バンジ プナップナン

Mā vo naḷamva sotova, māro bhañji punappunam.  
あってはならない。 あなたたちを、葦を[打ちひしぐ]ように、流れがまさしく、悪魔が、打ち砕くことが 繰り返し、

**Mā**/mā(adv)なけれ[禁止,強い決意,否定的願望,未来への危惧,疑問,否定等を示す **vo**/tvam:tumha(人代.pl.acc)汝,あなた **naḷamva**=naḷam/naḷa:;nala(m)[Sk.naḍa,naḷa]葦,芦,あし+iva/ **sotova**=soto/sota:①(n)[śru]耳②(m.n.m.ssg.nom)[sru]流,流水,流口+iva/, **māro**/māra(m.sg.nom)魔,悪魔,魔羅,魔王,死神 **bhañji**/bhañjati(v.aor.3sg) // bhañj]破る,破壊す **punappunam**/puna(adv.conj)[Sk.punar,punah]さらに,再び-ppuna 再三再四,しばしば。

(24-2) Sūkarapotikāvattu 雌仔豚の物語 338-343

Yathāpi mūleti imaṃ dhammadesanaṃ sathā veluvane viharanto gūthasūkarapotikaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、ある肥溜めの雌仔豚について語られたものである。

ある日、師がラージャガハ市に托鉢に入ろうとされたときに、一頭の雌仔豚を見て微笑を浮かべられた。師はアーナンダにおっしゃった。「あの雌仔豚は、カクサンダ世尊の教団で食堂の近くに住む雌鶏でした。彼女はあるヨーガ行者が内観の瞑想の主題を唱えているその法の声を聴いて、そこから生まれ変わって王家に再生し、ウツパリーという王女になりました。彼女はのちに、用便のために厠に入ったところ、蛆虫の山を見て、蛆虫の想念を生じて第一禪の境地を得ました。彼女は命の限り生きて、そこから生まれ変わって梵天界に再生しました。しかし、そこから寿命が尽きて死没し、輪廻の力により、今、豚の胎に再生したのです。このような子細を見て、私は微笑を浮かべたのです。」

これを聞いて、アーナンダ長老を始めとする比丘たちは、大いに焦燥心を起こした。師は彼らに焦燥を生じさせて、愛執の欠点を明らかにするため、大通りに立ったまま、次の詩句を唱えられた。

「338 頑固な根を断たなければ、木は切られてもまた成長するように、執着の潜勢力が断ち切れなければこの苦しみは何度も生じる。」「339 快樂に向かって流れる三十六の激流があるならば、その流れ、愛欲に根ざした考えは、悪しき見解をもつ人を運び去る。」「340 [愛欲の]流れはあらゆる方角へ流れる、蔓草が芽を吹きはびこるように。その蔓草が生じたのを見て根を見極めて断ち切れ。」「341 人々の快感ははびこりやすく欲深い。彼らは快樂に耽り安楽を求める、この人々は生死を繰り返す。」「342 執着の渴きに駆り立てられる人々は、罨にかかった兔のようにもがく。束縛にがんじがらめになり、長いあいだ、繰り返し苦惱におもむく。」「343 執着の渴きに駆り立てられる人々は、罨にかかった兔のようにもがく。それゆえ比丘は、執着の渴きを取り除き、自己の離欲を望むべし。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

その雌仔豚はそこから死没して、スヴァンナブーミの王家に再生した。そこから死没してバーラーナシー市に再生し、そこから死没してスッパラーカ港町の馬商人の家に再生した。そこから死没してカーヴィーラ港町の行商人の家に再生し、そこから死没してアヌラーダプラの権勢ある家柄に生まれた。そこから死没してその〔アヌラーダプラから〕南のポッカタ村のスマナという資産家の娘のスマナーとして生まれた。

さて、〔ポッカタ村の〕彼女の父は、その村が〔タミル人の侵攻により〕捨てられたとき、ディーガヴァーピ地方に行き、マハム二村というところに住んだ。そこにドゥッタガーマニ王の大臣のラクンタカ・アティンバラが何かの用事で来て彼女を見初めて、盛大な結婚式を挙げ、彼女を連れてマハーペンナ村へ行った。すると、コーティ山大精舎に住むアヌラ長老という人がその村に托鉢に行き、彼女の家の戸口に立ち、彼女を見て比丘たちに語りかけた。

「ご同肌よ、雌仔豚がラクンタカ・アティンバラ大臣の妻になったとは、なんと驚くべきことでしょう」と。彼女はその話を聞いて、過去の生存の覆いを破り、宿命通を得た。彼女はその途端、焦燥心を生じ、夫に許しを請い、盛大な支度をして五つの神通力を具えた長老尼たちのもとで出家した。そして、ティッサ・マハーヴィハーラで「大念処経」

〔Mahāsatiṭṭhānasuttam.DN22〕の法話を聴いて、預流果に確実に立った。

のちに〔ドゥッタガーマニ王によって〕タミル人の掃討が行われたとき、両親が住んでいるポッカタ村へ行き、そこに住んでいたが、カッラカ大精舎で「毒蛇喩経」〔Āsīvisopamasuttam.SN35-238〕を聴いて阿羅漢果に到達した。

彼女が般涅槃に入る日に、比丘たちと比丘尼たちに問われて、比丘尼サンガにすべてこれらの出来事を省略することなく語り、集まった比丘サンガの真ん中でマンドラ僧院に住む『ダンマパダ』の説法師のマハー・ティッサ長老とともに相和して、「私は過去世に人間の生まれから死没して雌鶏になり、そこで鷹によって頭を切られて〔死に〕、ラージャガハ市に再生して、女遍歴行者たちのもとで出家し、第一禪の世界に再生しましたが、そこから死没して長者の家に再生しました。そしてほどなく死没して豚の胎内に生まれ、そこから死没してスヴァンナブーミ、そこから死没してバーラーナシー、そこから死没してスッパラーカ港町、そこから死没してカーヴィーラ港町、そこから死没してアヌラーダプラ、そこから死没してポッカタ村と、善きに悪きにさまざまに十三の生存を得て、今生で焦燥心を起こして出家し、阿羅漢果に到達しました。皆さまも怠ることなく努力されますように」と言って四衆(比丘、比丘尼、在家信者、在家信女)に救いへの焦燥心を起こさせて、般涅槃した、ということである。

338. Yathāpi mūle anupaddave dalhe, chinnopi rukkho punareva rūhati; Evampi taṇhānusaye anūhate, nibbattaṭi dukkhamidaṃ punappunam.

338. あたかも、また、根が無禍にして堅固であるなら、たとえ、切断された木でも、まさしく、ふたたび成長するように、また、このように、渴愛の悪習（随眠）が打破されていないなら、この苦しみは、繰り返し発現する。

No.203 (2012年1月) 私は生まれ変わりますか？ 渴愛に気づけば輪廻が分かる No rebirth but re-becoming.

338. Yathāpi mūle anupaddave dalhe, Chinnopi rukkho punareva rūhati; Evampi taṇhānusaye anūhate, Nibbattaṭi dukkhamidaṃ punappunam

338. もしもその根が堅固なら 木をば截るとも芽は萌えて 再び繁るその如く この渴愛の潜在の 根絶なくば 苦の生起くり返されて 終わりなし 訳：江原通子

お釈迦様はこのように説かれます。「地下にしっかりと伸びた根が健在ならば、地上の樹木は伐られてもまた生えてくる。そのように、渴愛も根元から絶たなければ、再び何度でも苦しみが生まれてくるのです。」仏教を学んで、世の中の人々の生き方を観察して、欲はよくないと理解して、善い人間として生活することはそれほど難しいことではありません。しかし、潜在的に働く「生き続けたい」という意欲、即ち渴愛を発見して根絶するためには、ヴィパッサナーという自己観察方法が必要なのです。

ヤターピ ムーレ アヌパッダヴェー ダルヘー チンノーピ ルッコー プナレーワ ルーハティ  
 Yathāpi mūle anupaddave dalhe, chinnopi rukkho punareva rūhati;  
 あたかも、また、根が 無禍にして 堅固であるなら、 たとえ切断された、木でも、まさしく、ふたたび成長するように  
 Yathāpi=yathā/yathā(adv)[ya-thā]...の如くに,...の如し+pi/ mūle/mūla(n.sg.loc absolute)根,根本,元金,代価  
 anupaddave/anupaddava(a.n.sg.loc absolute)[an-upaddava]危難なき,安全なる←upaddava(m)[upa-dava]禍,害,横災,困厄  
 dalhe/dalha(a.n.sg.loc absolute)堅固の,確固たる, chinnopi=chinno/chinna(a.m.sg.nom)[chindati の pp]切断されたる,切られたる  
 ←chindati(v.pp)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す+pi/ rukkho/rukkha(m.sg.nom)木,樹木 punareva=punar/puna(adv.conj)  
 [Sk.punar,punah]さらに,再び punad eva,punar eva さらに+eva/ rūhati/rūhati : ①(v.pr.3sg)[rub = rohati, ruyhati]生長す,栄える;治  
 癒す;影響す②(v)[rundh=rumbhati,rumhati,rundhati.cf.rujjhati]破られる,中止す;

エーワンピ タンハーヌサイエー アヌーハター ニツバツタティー ドウツカミダン プナツプナン  
 Evampi tanhānusaye anūhate, nibbattatī dukkhamidaṃ punappunam.  
 また、このように、渴愛の悪習(随眠)が打破されていないなら、 発現する。 この苦しみは、 繰り返す  
 Evampi=evam/evam(adv)かく,かくの如く+pi/ tanhānusaye=tanhā/tanhā(f.依属)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲  
 +anusaye/anusaya(m.sg.loc absolute)[Sk. anūsaya < anuseti]随眠,煩惱,使 anūhate/anūhata(a.m.sg.loc absolute)[an-ūhaññati の pp.]根  
 絶されざる,破壊されざる←ūhaññati(a)[ūhanati の pass]汚される,亂される←ūhanati : ①(v)[ud-han]亂す,汚す,切断す,放出す,排  
 便す②(v)[ud-hr]擧げる,取り去る, nibbattatī/nibbattati(v.pr.3sg)[nir-vrt] 生ずる,発生す,生起す  
 dukkhamidaṃ=dukkham/dukkha(a.n.sg.nom)苦,苦痛,苦惱+idaṃ/ima(指代 n.sg.nom)これ punappunam/punappunam(ind)again and  
 again.

339. Yassa chattimsati sotā, manāpasavanā bhusā; Māhā [vāhā (sī. syā. pī.)] vahanti duddiṭṭhim, sankappā rāganissitā.  
 339.彼に、意に合うもの(欲望の対象)へと流れ行く、激しい三十六の流れがあるなら、 諸々の貪欲[の思い]に依存した  
 諸々の妄想が、大いなるものとなり、 悪しき見解を運び来る。

No.204 (2012年2月) 苦しみの泥沼 邪見の構造 Problem of evil.

339.Yassa chattimsati sotā, Manāpasavanā bhusā; Vāhā vahanti duddiṭṭhim. Sankappā rāganissitā

339.こころ喜び流れゆく、三十六※なる激流は、 快樂求め流さるる、 邪見の人を蕩尽す ※ 自他各十八 計三十六の愛行(渴  
 愛の仕事) 訳: 江原通子

ヤッサ チャツティンサティ ソーター マナーパサワナ ブサー  
 Yassa chattimsati sotā, manāpasavanā bhusā;  
 彼に、三十六の 流れがあるなら、 意に合うもの(欲望の対象)へと流れ行く、 激しい  
 Yassa/ya(関代 m.sg.gen)[Sk.yah]〜である人,〜であるもの chattimsati=cha/6+tt/+timsati/30 sotā/sota : ①(n)[śru]耳②(m.n.pl.nom)  
 [sru]流,流水,流口, manāpasavanā=manāpa/manāpa(a 有対)可意の,適意の+savanā/savana : ①(n)[=savana < sunāti śru]耳;聞,聴聞②  
 (n→m.pl.nom)[savati sru]流れ. ③(n)[<savati su]発生,出生,生産 bhusā/bhusa : ①(m)[cf.Sk.busā,buśa]穀殼,もみから②(a.pl.nom)  
 [cf.Sk.bhṛśa]強き,偉大な acc.bhusam(adv)大いに,強く;

ワーハー ワハンティ ドウディツティン サンカツパー ラーガニツスイター  
 Vāhā vahanti duddiṭṭhim, sankappā rāganissitā.  
 運び 来る。 悪しき見解を 諸々の妄想が 諸々の貪欲[の思い]に依存した  
 Vāhā/vāha(a.m.pl.nom)[ / < vahati]運ぶ;車,乗物;車の荷 vahanti/vahati(v.pr.3sg)[ / vah]運ぶ,運搬す,運載す; 実行す  
 duddiṭṭhim/duddiṭṭhin(a.m.sg.acc)←duddiṭṭha(a)[du-ditṭha]悪見の,悪く見られたる, sankappā/sankappa(m.pl.nom)[<sam-klp]思  
 惟,思念,思-rāga 思念の貪 rāganissitā=rāga/rāga(m 依対)[ / cf.rajati]貪,貪欲,染,染色,色彩+nissitā/nissita(a.m.pl.nom)←nissayati(v)  
 [Sk.nīśrayati < śri]依る,依止す,依着す

340. Savanti sabbadhi sotā, latā uppajja [ubbhijja (sī. syā. kaṃ. pī.)] tiṭṭhati; Tañca disvā latam jātam, mūlam paññāya chindatha.  
 340.諸々の[渴愛の]流れは、一切所に流れ行く。[貪欲の]蔓草は、芽生えては止住する。しかして、その蔓草が生じたの  
 を見て、智慧によって、[その]根を断て。

No.205 (2012年3月) なぜ悪があるのか 悪が「生きること」を監禁する Life enslaved by evil.

340.Savanti sabbadhi sotā,Latā uppajja tiṭṭhati; Tañca disvā latam jātam,Mūlam paññāya chindatha.

340.愛欲の流れ涇てしなく、蔓は芽を吹き葉は繁る、蔓生ずるを見し時は、智慧をもて断てその根をば 訳: 江原通子

サワンティ サツバディ ソーター ラター ウツパツジャ ティツタティ  
 Savanti sabbadhi sotā, latā uppajja tiṭṭhati;  
 流れ行く。 一切所に 諸々の[渴愛の]流れは、 [貪欲の]蔓草は、 芽生えては 止住する。  
 Savanti/savati : ①(v.pr.3pl)[Sk.sravati sru]流れる②(v)[su]生ず sabbadhi/sabbadhi[adv]everywhere sotā/sota : ①(n)[śru]耳  
 ②(m.n.pl.nom)[sru]流,流水,流口, latā/latā(f.sg.nom)[ / ]蔓草,葛(かずら) uppajja/uppajja(ger)←uppajjati(v.ger)[ud-pajjati < pad]起  
 る,生ず,発生す iṭṭhati/tiṭṭhati(v.pr.3sg)[Sk.tiṭṭhati sthā]立つ,住立す,止まる,存続す;

タンチャ ディスワー ラタン ジャータン ムーラン パンニャーヤ チンダタ  
 Tañca disvā latam jātam, mūlam paññāya chindatha.  
 しかして、 見て、 その蔓草が 生じたのを [その]根を 智慧によって、 断て。  
 Tañca=tañ/ta(人指示代 f.sg.acc)彼,その,彼女+ca/ca(conj)〜と,また,しかし,〜も,そして disvā/dassati(v.ger) :  
 ①[Sk.drś,darś,draś,drakṣ]見る,認める,理解す②[dadāti の fut,Sk.dāsyati]1sg.dassāmi. latam/latā(f.sg.acc)[ / ]蔓草,葛(かずら)  
 jātam/jāta(a.f.sg.acc) / janati の pp]生ぜる,発生の,生起の←janati(v)[ / jan]生ずる,産む, mūlam/mūla(n.sg.acc)根,根本,元金,代価  
 paññāya/paññāya : ①(a)[pajānāti の ger]知りて,了知して②(a.sg.inst)[paññā の instr.gen 等]慧によりて,慧の  
 chindatha/chindati(v.imper.2pl)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す。

341. Saritāni sinehitāni ca, somanassāni bhavanti jantuno; Te sātasiṭā sukhesino, te ve jātijarūpagā narā.

341. 諸々の〔渴愛の〕流れがあり、かつまた、諸々の愛執〔の対象〕があり、人には、〔その原因となる〕諸々の悦意（満足の思い）がある。彼らは、快楽に依存する者たちであり、安楽を探し求める者たちである。彼らは、まさに、生と老〔の輪廻〕へと近づき行く人たちである。

No.206 (2012年4月) 苦に脅迫されて輪廻する 楽は少なき苦は多き人生 Life is intimidated by suffering.

341. Saritāni sinehitāni ca, Somanassāni honti jantuno; Te sātasiṭā sukhesino, Te ve jātijarūpagā narā

341. 愛執の流れさまざまに、人は依存をたのしめど、歓と楽とを遂う人の、行きつく先に 生老（輪廻）あり 訳：江原通子

サリターニ スィネーヒターニ チャ ソーマナッサーニ パワンティ ジャントウノー  
Saritāni sinehitāni ca, somanassāni bhavanti jantuno;  
諸々の流れがあり、諸々の愛執〔の対象〕があり、かつまた、諸々の悦意が有る。人には、  
Saritāni/Sarita(a.n.pl.nom)←sarati : ①(v.pp)[sr] 流る、行く②(v)[=sumarati,Sk.smṛti smṛ]記憶す、憶念す③(v)[śr]砕く、砕破す  
sinehitāni/sinehita(a.n.pl.nom)[sineheti の pp]愛執の、貪愛せる←sineheti(v)[sineha の denom または siniyhati の caus]愛す ca/  
somanassāni/somanassa(n.pl.nom)[Sk.BSk.saumanasya <su-mano]喜、喜悅 bhavanti/bhavati(v)[bhū] ある、存在する  
jantuno/jantu(m.sg.gen)[//] : ①人、有情②草;

テー サータスィター スケーシノー テー ヴェー ジャーティジャルーパガー ナラー  
Te sātasiṭā sukhesino, te ve jātijarūpagā narā.  
彼らは、快楽に依存する、安楽を探し求める者たちである。彼らは、まさに、生と老〔の輪廻〕へと近づき行く人たちである。

Te/ta(人指示代 m.pl.nom)彼、その、彼女 sātasiṭā=sāta/sāta(a.n 依対)[Sk.śāta]可意なる、悦意の、愉快、喜悅-sita 悦に依止せる  
+sita/sita : ①(a.m.pl.nom)[sāyati śri の pp]依止せる、依存せる②(a.n)[=mihita,smi の pp.cf.hasita]微笑せる、微笑、笑  
sukhesino=sukha/sukha(a.n 依対)[//]楽、安楽、幸福+esino/esin(a.m.pl.nom)[esa-in,Sk.esin]求める、尋求する←esati(v)[ā-iṣ]求む、探  
す、努力す、te/ ve/ jātijarūpagā=jāti/jāti(f 相)[// cf.janati]生、誕生、生れ、血統、種類+jarā/jarā(f 依対)jaras(n)[jī]老、老衰  
+ūpagā/ūpaga(a.m.pl.nom)←upagacchati(v.pp)[upa-gacchati <gam]近づく、接近する、著手す narā/nara(m.pl.nom)人、人々。

342. Tasiṇāya purakkhatā pajā, parisappanti sasova bandhito [bādhito (bahūsu)]; Saṃyojanasaṅgasattakā, dukkhamupenti punappunam cirāya.

342. 渴愛〔の思い〕で〔特定のものを〕偏重する人々は、捕縛された兔のように這い回る。束縛するもの（欲望の対象）に執着〔の思い〕ある有情たちは、長きにわたり、繰り返し、苦しみへと近づき行く。

No.207 (2012年5月) 恐怖の大海を渡る 楽は少なき苦は多き人生 Across the ocean of fear.

342. Tasiṇāya purakkhatā pajā Parisappanti sasova bandhito Tasmā tasiṇam vinodaye Ākankhanta virāgamattano

343. Tasiṇāya purakkhatā pajā Parisappanti sasova bandhito Tasmā tasiṇam vinodaye Ākankhanta virāgamattano

342. わなにかかりし野兎のはね跳ぶ如く欲望の 縛ばくと著じゃくとにからまれて くり返し苦しに到る

343. わなにかかりし野兎の 如くに人は苦しに到る されば離貪を求む比丘 渴愛をこそ滅し去れ

タスィナーヤ プラッカター パジャー パリサツパンティ サソーワ バンディトー  
Tasiṇāya purakkhatā pajā, parisappanti sasova bandhito;  
渴愛〔の思い〕で〔特定のものを〕偏重する 人々は、 這い回る。 兔のように 捕縛された  
Tasiṇāya/tasiṇā(f.sg.dat)[=tanhā]渴愛、愛 purakkhatā/purakkhata(a.f.sg.nom)←purakkharoti(v.pp)[cf.Sk.puras-karoti]前におく、尊敬  
す pajā/pajā(f.sg.nom)[Sk.pajā <pra-jan] 人々、 parisappanti/parisappati(v.pr.2pl)[pari-srp]はい廻る、おそれる、恐怖す  
sasova=saso/sasa(m.sg.nom)兎、うさぎ+iva/ bandhito/bandita(a.m.sp.nom)←bandhati(v.pp)[// bandh]縛る、結ぶ;

サンヨージャナサンガサツタカー ドウッカムペンティ プナップナン チラーヤ  
Saṃyojanasaṅgasattakā, dukkhamupenti punappunam cirāya.  
束縛するもの（欲望の対象）に執着〔の思い〕ある有情たちは、苦しみへと近づき行く。 繰り返し、 長きにわたり  
Saṃyojanasaṅgasattakā=samyojana/samyojana(n 相)[=saññojana <saṃyuñjati]結、繫縛、結縛+saṅga/saṅga(m 依具)[<sañj]着、染着、  
執着+sattakā/sattaka(a.m.pl.nom)←satta : ①(a)[sajjati sañj:pp]懸着せる、執着の、固着の②(m)[sat]有情、衆生、靈③(a)[sapati śap:pp]  
咀(のろ)われた、呪咀せる④(num)七、 dukkhamupenti=dukkham/dukkha(a.n.sg.acc)苦、苦痛、苦惱+upenti/upeti(v.pr.3pl)[upa-i]ゆく、  
近づく、獲得する、到る punappunam/punappunam(ind)again and again cirāya/cira(a.n.sg.dat.adv)[//]久しき

343. Tasiṇāya purakkhatā pajā, parisappanti sasova bandhito; Tasmā tasiṇam vinodaye, ākankhanta [bhikkhū ākañkhī (sī), bhikkhu ākañkham (syā.)] virāgamattano.

343. 渴愛〔の思い〕で〔特定のものを〕偏重する人々は、捕縛された兔のように這い回る。自己の離貪を望んでいる者よ、それゆえに、渴愛〔の思い〕を取り除くがよい。

タスィナーヤ プラッカター パジャー パリサツパンティ サソーワ バンディトー  
Tasiṇāya purakkhatā pajā, parisappanti sasova bandhito;  
渴愛〔の思い〕で〔特定のものを〕偏重する 人々は、 這い回る。 兔のように 捕縛された

タスマー タスィナン ヴィノーダイエー アーカンカンタ ヴィラーガマツタノー  
Tasmā tasiṇam vinodaye, ākankhanta virāgamattano.  
それゆえに、 渴愛〔の思い〕を 取り除くがよい。 望んでいる者よ、 自己の離貪を  
Tasmā/tasmā(a)[ta の abl]それより、彼より、それ故に←ta(人指示代 n.sg.abl)彼、その、彼女 tasiṇam/tasiṇā(f.sg.acc)[=tanhā]渴愛、愛  
vinodaye/vinodeti(v.opt.3sg)[vi-nudati <nud の caus]除く、除去す、除遣す、ākankhanta/ākankhanta(a.m.voc)←ākankhati(v.ppr)[ā-  
kankhati <kāñkṣ]希望す、意欲す、願う←kañkhati(v)[Sk.kāñkṣ]疑う、期待す virāgamattano=virāgam/virāga(m.sg.acc)[vi-rāga]離貪、  
離、遠離、離欲、離貪者+attano/attan(m.sg.gen)[Sk.ātman]我、自己、我体。

(24-3) Vibbhantabhikkhuvatthu 還俗した比丘の物語 344

Yonibbanathoti imam dhammadesanaṃ satthā veḷuvane viharanto ekaṃ vibbhantakaṃ bhikkhuṃ ārabha kathesi.

この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、ある還俗した比丘について語られたものである。

その比丘は、マハー・カッサパ長老と共に住み、四段階の禪に入ることができるようになったが、自分の叔父の金細工師の家の素晴らしい品々を見て、それに心を奪われて還俗した。ところが家の人々は、彼が怠け者で仕事をしたがらないので、家から追い出してしまった。彼は悪友たちと付き合い、泥棒をして生計を立てながら過ごした。するとある日、人々は彼を捕らえて後ろ手にきつく縛り上げ、四つ辻ごとに鞭で打って、処刑場へ引っ張っていった。

マハー・カッサパ長老が托鉢に歩くために市内に入ろうとしたとき、彼が南の門から連れ出されるのを見て、縛めをゆるめさせて、「以前、あなたが完全に行じた瞑想の主題をもう一度思い起こさない」と言った。彼はその訓戒によって念を集めさせることができ、ふたたび第四禪に入ることができた。さて、人々は彼を処刑場へ連れていき、「やつを殺そう」と槍先を熱しはじめた。彼は恐れもせず怯えもしなかった。すると、四方に立った人々が、剣、刀、槍などの武器を掲げても、彼が恐怖の色を表わさないのを見て、「おい、見たまえ。この男は何百人もの武器を手にした兵士たちの真ん中で、全く怖がらず震えさえしない。何とすごいことだろう」と驚嘆して大声で叫び、王にこのことを報告した。

王は事の次第を聞いて、「彼を放免せよ」と言った。人々は師のもとへも行って、このことを告げた。師は光明を放たれて、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えた。「344 執着を脱し執着の森から解放され、放着の森から逃れたのに執着の森に走る、その人を見よ、解放されたのに束縛へと走る。」と。

この教えを聴いて、彼は王の家来たちの中で槍先を突きつけられてすわったまま、物事の生成と衰滅を瞑想し、三つの相を浮かび上がらせ、(五)蘊について瞑想を深めて預流果に到達し、瞑想の楽しみを味わいつつ空中に飛び上がり、空を飛んで師のもとへ行って師を礼拝し、王を含む会衆の真ん中で阿羅漢果に到達した。

344. Yo nibbanatho vanādhimutto, vanamutto vanameva dhāvati; Taṃ puggalametha passatha, mutto bandhanameva dhāvati.

344. [まさに] その、[欲の] 林の下生えなき者となりながら、[欲の] 林に向かう者— [欲の] 林から解き放たれた者となりながら、まさしく、[欲の] 林へと走り行く— 来たれ、見よ、その人を。[欲の結縛から] 解き放たれた者となりながら、まさしく、[欲の] 結縛へと走り行く。

No.208 (2012年6月) こころは転落しやすい 解脱するまで人生は矛盾 Mind falls easily but hard to uplift.

344. Yo nibbanatho vanādhimutto, Vanamutto vanameva dhāvati; Taṃ puggalametha passatha, Mutto bandhanameva dhāvati.

344. 無林の者となりながら 欲林目指す者のあり 欲林を出(いて) 欲林へ 再び走る者のあり 見よや 欲なる縛(いましめ)を 放たれながら欲林に 再び走る彼の姿を 訳: 江原通子

ヨー ニツバナトー ワナーディムットー ワナムットー ワナメーワ ダーワティ  
Yo nibbanatho vanādhimutto, vanamutto vanameva dhāvati;  
その、林の下生えなき者となりながら、林に向かう者 林から解き放たれた者となりながら、林へとまさしく、走り行く  
Yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの nibbanatho/nibbanatha(m.sg.nom)[nir-vanatha]無稠林,無欲←vanatha(m)[vana-tha,BSk. // ]林叢,欲林,愛林,欲念 vanādhimutto=vana/vana(n 依属)森,林;欲林,欲望+adhimutto/adhimutta(a.m.sg.nom)[adhimuccati の pp.,BSk.adhimukta]信解せる,勝解せる,志向せる, vanamutto=vana/vana(n 依奪)+mutto/mutta : ①(a.m.sg.nom)[muñcati muc の pp.Sk.mukta]脱せる,解脱せる,放出の②(n)[Sk.mūtra]小便,尿 vanameva=vanam/vana(n.sg.acc)+eva/dhāvati/dhāvati(v.pr.3sg)[ // dhāv] : ① 走る,流る aor.dhāvi : ②清める cf.dhovati;

タン プッガラメータ パッサタ ムットー バンダナメーワ ダーワティ  
Taṃ puggalametha passatha, mutto bandhanameva dhāvati.  
その 人。来たれ、 見よ、 解き放たれた者となりながら、 結縛へとまさしく、 走り行く。  
Taṃ/ta(人指代 m..sg.acc)彼,その,彼女 puggalametha=puggalam/puggala(m.sg.acc)[Sk.pudgala]人,士,士夫,個人,補特伽羅 +etha/eti(v.imper.2pl)[i]行く passatha/passati(v.imper.2pl)[paś Sk.paśyati]見る;見出す,知る, mutto/mutta : ①(a.m.sg.nom)[muñcati muc の pp.Sk.mukta]脱せる,解脱せる,放出の(n)[Sk.mūtra]小便,尿- bandhanameva=bandhanam/bandhana(n.sg.acc)[ // ]縛,捕縛,結縛,拘束,接目,結節+eva/ dhāvati/dhāvati(v.pr.3sg)[ // dhāv] : ① 走る,流る aor.dhāvi : ②清める cf.dhovati,;

(24-4) Bandhanāgāravatthu 牢獄の物語 345-346 ←参照 Bandhanāgāra-jātaka(201)

Natam dalhanti imam dhammadesanam sathhā jetavane viharanto bandhanāgāraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、牢獄について語られたものである。

あるとき、人々がおおぜいの強盗、追い剥ぎ、人殺しなどの賊を捕らえてコーサラ国王に見せた。王は彼らを枷や縄や鎖で縛らせた。

さて、三十人の比丘たちが地方から師に会うためにやってきて、師に会って礼拝し、次の日にサーヴァッティー市に托鉢に行き、牢獄に行ってこれらの賊を見た。托鉢から戻って夕方に如来に近づいて、「尊師よ、今日、私たちは托鉢に歩き、牢獄でおおぜいの賊が足枷などで縛られ大きな苦痛を味わっているのを見ました。彼らはその縛めを破って逃げることはできません。いったいこれらの縛めよりも堅固な縛めというものは他にあるでしょうか」と訊ねた。

師は、「比丘たちよ、そのような縛めは何ほどのものでしょうか。財宝、収穫、妻子などへの執着の集まり、煩惱の集まりがありますが、それは牢獄の縛めの百倍も千倍も堅固なものです。このように大きい、断ち切るのが難しい縛めを、昔の賢人たちは断ち切って、ヒマラヤ山に入って出家しました」とおっしゃって、過去の事を取り出された。

#### 過去物語

昔、パーラーナシーでブラフマダッタ王が治めていたとき、菩薩はある貧しい家長の家に生まれた。菩薩が成人に達したとき、父は死んだ。菩薩は賃仕事をして母親を養った。すると、母親は彼が望まないのに、一人の良家の娘を家に迎えて、その後亡くなった。

彼の妻には子が宿った。彼は子が宿ったことを知らずに、「妻や、あなたは賃仕事なり新しい夫選びをするなりして、生活しなさい。私は出家しようと思う」と言った。妻は菩薩に、「私はおなかに子ができました。私がお産をした子供を見てから出家なさいませ」と言った。菩薩は、「よかろう」と同意して、妻がお産をしたとき、「妻や、あなたは無事にお産をしました。今、私は出家しようと思う」と問いかけた。すると、妻は菩薩に、「息子が乳離れるまでお待ちください」と言い、また妊娠した。

菩薩は考えた。「妻の同意をもらって出家することはできない。妻に言わずに逃げ出して出家しよう。」菩薩は妻に何も言わずに、夜、起きて逃げ出した。すると、菩薩を都の警備人たちが捕らえた。菩薩は、「旦那さま、私は母を養っている者です。私を逃がしてください」と言って自分を解放してもらい、ある場所で夜を過ごしてからヒマラヤ山に入り、仙人の出家をして、神通力と入定を完成し、禅定を楽しみながら過ごした。菩薩はそこに住みながら、「妻子の束縛、煩惱の束縛という、このように断ち難いものを、私は断ち切った。」と感興の語を發した。(過去物語終わり)

師はこの過去の事を取り出されて、菩薩のときに師が發せられた感興の語を明らかにしつつ、次の詩句を唱えられた。「345 鉄や木材や荒縄の、縛めを堅固であると賢者は言わない。宝石や耳飾りに熱心に執着し、子や妻たちに愛着する、」「346 垂れ下がり、緩くとも、解き難い、これを堅固な束縛と賢者は言う。愛着せず、欲望の楽しみを捨てて、これを断ち切つて [賢者は] 出家する。」と。

法話が終わったとき、おおぜいの人々が預流果などを得た。

345. Na taṃ dalhaṃ bandhanamāhu dhīrā, yadāyaṣaṃ dārujapabbajaṅca [dārūjaṃ babbajaṅca (sī. pī.)]; Sārattarattā maṇikuṇḍalesu, puttesu dāresu ca yā apekkhā.

345. [まさに] その、鉄でできているものを、さらには、木製のものや麻製のものも— 慧者たちは、それを、堅固な結縛と言わない。諸々の宝珠や耳飾にたいする貪染 [の思い] に染まったもの— 子たちにたいする、さらには、妻たちにたいする、 [まさに] その、期待 [の思い] なるもの—

No.209 (2012年7月) 世間の自由 VS 仏教の自由 苦しみは束縛によって生まれる Multidimensional freedom.

345. Na taṃ dalhaṃ bandhanamāhu dhīrā, Yadāyaṣaṃ dārujapabbajaṅca; Sārattarattā manikundalesu, Puttesu dāresu ca yā apekkhā.

346. Etam dalhaṃ bandhanamāhu dhīrā, Ohāriṇaṃ sithilaṃ duppamuṅcaṃ; Etampi chetvāna paribbajanti, Anapekkhino kāmasukhaṃ pahāya.

345. 鉄や木や麻でつくりし縛 (いましめ) も 堅牢なりと智者言わず 宝石、耳環、妻や子に 寄す執心ぞ並ならぬ

346. ゆるやかなれど のしかかり 逃げ難ければ欲楽を 「堅牢な縛」と智者は言い 断固と断ちて遍歴す 訳: 江原通子

ナ タン ダルハン バンダナマーフ ディーラー ヤダーヤサン ダールジャン バツバジャン チャ  
Na taṃ dalhaṃ bandhanamāhu dhīrā, yadāyaṣaṃ dārujaṃ babbajaṅ ca ;  
それを、堅固な 結縛と言わない。慧者たちは、 鉄でできているものを、木製のものや麻製のものもさらに  
Na/ taṃ/ta(人指示代 n.sg.acc)彼,その,彼女 dalhaṃ/dalha(a.n.sg.nom)堅固の,確固たる  
bandhanamāhu=bandhanam/bandhana(n.sg.nom)[ // ]縛,捕縛,結縛,拘束,接目,結節+āhu/āha(v 完了 3pl)[ // ]言う,言った. 2sg,3sg.  
āha ; 3pl. āhu, āhaṃsu dhīrā/dhīra(a.m.pl.nom)堅固な,賢き,賢者,慧者,英賢, yadāyaṣaṃ=yadā/yadā(adv)...の時に. yadā... tadā  
...の時にその時に+āyaṣaṃ/āyasa(a.n.ag.acc)[ // <ayas,ayo]鉄の,鉄製の,金属の,黄金の dārūjaṃ=dāru/dāru(n 依属)木,材木-ja 木製の+jaṃ/ja←-ja(a)suffix[ <jan. cf. janati] 生ぜる babbajaṅca=babbajaṅ/babbaja(m.sg.acc)[cf.Sk.balbaja]=pabbaja 燈心草+/ca;

サーラッタラッター マニクンダレース プッテース ダーレース チャ ヤー アペッカー  
Sārattarattā maṇikuṇḍalesu, puttesu dāresu ca yā apekkhā.  
貪染に染まったもの 諸々の宝珠や耳飾にたいする 子たちにたいする、妻たちにたいする、さらには、その、期待なるもの  
Sārattarattā=sāratta/sāratta(a 依具)[=samratta,sārajati の pp]染着せる,執着の+rattā/ratta : ①(a.f.sg.nom)[rañjati の pp.,Sk.rakta]染色せる;赤き;染着せる,貪染の,染心の②(n)[Sk.rātra] = ratti.rattā(f)夜 maṇikuṇḍalesu=maṇi/mani(m)[ // ]摩尼,宝珠,宝石; 骰子,さいころ-kuṇḍala 宝石の耳環+kuṇḍalesu/kuṇḍala(n.pl.loc)[BSk. // ]耳環,イヤリング, puttesu/putta(m.pl.loc)子,子息; 男児  
dāresu/dāra(m.pl.loc)dārā(f)若い女,結婚した姉,妻 ca/ yā/ya(関代 f.sg.nom)[Sk.yah]~である人,~であるもの  
apekkhā/apekkhā:apekhā(f.sg.nom)[Sk.apekṣā]期待,待望,欲求,希望,愛情.

346. Etam dalhaṃ bandhanamāhu dhīrā, ohāriṇaṃ sithilaṃ duppamuñcaṃ; Etampi chetvāna paribbajanti, anapekkhino kāmasukhaṃ pahāya.

346. 重くのみしかかり、緩やかではあるが、解き放ち難きもの— 慧者たちは、これを、堅固な結縛と言う。〔彼らは〕これさえも断ち切って、遍歴遊行する— 期待なき者たちとなり、欲望の楽しみを捨棄して。

エータン	ダルハン	バンドナマーフ	ディーラー	オーハーリナン	スイティラン	ドゥツパムンチャン
Etam	dalhaṃ	bandhanamāhu	dhīrā,	ohāriṇaṃ	sithilaṃ	duppamuñcaṃ;
これを、	堅固な	結縛と言う。	慧者たちは、	重くのみしかかり、	緩やかではあるが、	解き放ち難きもの

**Etam**/eta,etad(pron.a.n.sg.acc)これ **dalhaṃ**/dalha(a.n.sg.nom)堅固の,確固たる **bandhanamāhu=bandhanam**/bandhana(n.sg.nom)[ 〃 ]縛,捕縛,結縛,拘束,接目,結節+āhu/āha(v完了3pl)[ 〃 ]言う,言った. 2sg,3sg. āha ; 3pl. āhu, āhamsu **dhīrā**/dhīra(a.m.pl.nom)堅固な,賢き,賢者,慧者,英賢, **ohāriṇaṃ**/ohārin(a.n.sg.acc)[ohāra-in < avaharati]下に引く,重き **sithilaṃ**/sithila(a.n.sg.acc) [=saṭhila.Sk.śithira.śithila]徐緩の,ゆるやかな **duppamuñcaṃ**/duppamuñca(a.n.sg.acc)[du-pamuñca]解脱し難き;

エータンピ	チェトウワーナ	パリツバジャンティ	アナペッキノー	カーマスカン	パハーヤ
Etampi	chetvāna	paribbajanti,	anapekkhino	kāmasukhaṃ	pahāya.
これさえも	断ち切って、	遍歴遊行する	期待なき者たちとなり、	欲望の楽しみを	捨棄して。

**Etampi=etam**/ta(人指示代 n.sg.acc)彼,その,彼女+**pi**/ **chetvāna**/chindati(v.ger)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す ger.chinditvā,chetvā **paribbajanti**/paribbajati(v.pr.3pl)[pari-vraj]遊行す,遍歴す, **anapekkhino**/anapekkhin(a.m.pl.nom)[an-apekkhin]期待なき,希望せざる **kāmasukhaṃ=kāma**/kāma(m.n 依属)欲,愛欲,欲念,欲情,欲楽+**sukhaṃ**/sukha(a.n.sg.acc)[ 〃 ]楽,安楽,幸福 **pahāya**/pahāya(v)[pajahati の ger]捨てて←pajahati(v)[pa+hā+a](hā が二重になり,前の h が j に変わる)諦める;放棄する;見捨てる

(24-5) Khemātherīvatthu ケーマー長老尼の物語 347

Ye rāgarattāti imaṃ dhammadesanaṃ satthā veļuvane viharanto khemaṃ nāma rañño bimbisāssa aggamaheṣiṃ ārabba kathesi.  
この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、ケーマーというピンピサーラー王の第一王妃について語られたものである。

彼女はパドゥムツタラ仏の足元で立てた誓願のゆえに、とてもとても美しく見目麗しかったという。しかし、「師は容姿が美しいことの欠点を説かれた」と聞いて、師のもとへ行くことを望まなかった。

ピンピサーラー王はケーマー王妃が容姿に自惚れていることを知って、竹林精舎の称賛を含む歌を作らせて、踊り子などに与えさせた。踊り子たちがその歌を歌っているのを聴いて、ケーマー王妃にとって竹林精舎はまだ見たこともなく聞いたこともないところのように思われた。彼女は、「どの園林について歌っているのですか」と訊ね、「王妃さま、あなたさまの竹林精舎の園林を歌っているのでございます」という答えを聞いて、園林に行きたくなくなった。

師は、王妃が来ると知って、会衆の真ん中にすわって法を説きながら、棕櫚の葉の団扇を持ってご自分の傍らに立って扇いでいる大変美しい女性を「神通力で」造り出された。ケーマー王妃は入ってくるときに、その女性を見て考えた。「正しく覚られたお方は美しい容姿の欠点を説いておられると人々は言うけれど、世尊のおそばにあの女性が扇いで立っている。私は彼女のほんのかけらほどにも及ばない。私はあのような美しい女性を見たことがない。師についてありもしないことを噂しているのだと思うわ」と思い、如来が語る声にもうわの空で、その女性をみつめて立っていた。

師は王妃の心の動きを観察されて、「ケーマーよ、あなたは、容姿に確かなものがあると考えていました。ご覧なさい。今、容姿に確かなものなどないことを」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「惨めで、不浄で、汚らわしい、かたまり(身体)を見なさい、ケーマーよ。膿を垂らし、排泄するもの、愚かな人々が熱望するものを。」と。

ケーマー王妃は、詩句の終わりに預流果を確かなものにした。すると、師は彼女に、「ケーマーよ、これら衆生は、愛欲に染まり、憎しみに心悪くし、迷妄に惑い、自分の執着の河を越えることができず、まさにそこに絡まっているのです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「347 愛欲に染まった人々は流れに身をまかせ、蜘蛛が自分で作った網に絡まるように。賢い人々はそれを断ち切って出ていく、あらゆる苦を捨てて執着なき者になって。」と。

法話が終わったとき、ケーマーは阿羅漢果に確実に立った。おおぜいの人々にとっても法話は意義深いものであった。師は王に言われた。「大王よ、ケーマーは出家するか般涅槃に入るべきです。」「尊師よ、出家させてください。般涅槃はさせないでください。」ケーマーは出家して、上首の女弟子になった。

347. Ye rāgarattānupatanti soṭaṃ, sayamkatam makkakāṭakova jālam; Etampi chetvāna vajanti dhīrā, anapekkhino sabbadukkham pahāya.

347.彼ら、貪欲【の思い】に染まった者たちは、【渴愛の】流れに従い行く—蜘蛛が、自ら作った網に【からまる】ように。慧者たちは、これをもまた断ち切って、行く—期待なき者たちとなり、一切の苦しみを捨棄して。

No.210 (2012年8月) 自分が作った網に自分でかかる 苦しみとは、身から出た鏑 Build your prison and get imprisoned.

347. Ye rāgarattānupatanti soṭaṃ Sayamkatam makkakāṭakova jālam Etampi chetvāna vajanti dhīrā Anapekkhino sabbadukkham pahāya  
347.おのれの吐きし網伝う 蜘蛛のごとくに人もまた おのれが欲に流さる 賢者はそれを断ち切りて 執着を捨てて苦を滅す 訳：江原通子

イエー ラーガラッターヌパタンティ ソータン サヤンカタン マッカタコーワ ジャーラン  
Ye rāgarattānupatanti soṭaṃ, sayamkatam makkakāṭakova jālam;  
彼ら、貪欲【の思い】に染まった者たちは、従い行く【渴愛の】流れに 自ら作った 蜘蛛が、ように。網に【からまる】  
Ye/ya(関代 m.pl.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの rāgarattānupatanti=rāga/rāga(m 依具)[ // cf.rajati]貪,貪欲,染;染色,色彩-  
ratta 貪欲に染まれる+rattā/ratta : ①(a)[rañjati の pp.,Sk.rakta]染色せる;赤き;染着せる,貪染の,染心の②(n)[Sk.rātra] = ratti.rattā(f)  
夜+anupatanti/anupatati(v.pr.3sg)[anu-patati] : ① 従う② 落ちる,攻む pp. anupatita soṭaṃ/sota : ①(n)[śru]耳②(m.n.sg.acc)[sru]流,  
流水,流口, sayamkatam=sayam/sayam(adv)[Sk.svayam]自ら,自分で-kata 自作,自造+katam/kata:,kata(an.sg.acc)[karoti:pp]なされ  
たる,為作せる,行作の makkakāṭakova=makkakāṭako/makkakāṭaka(m.sg.nom)[=makkakā ㊦ 蜘蛛,くも+iva/ jālam]jāla : ①(n.sg.acc)[ // ]  
網,羅網②(m)[Sk.jvāla]光,光耀;

エータンピ チェートウワーナ ワジャンティ ディーラ アナペッキノー サツパドゥッカナン パハーヤ  
Etampi chetvāna vajanti dhīrā, anapekkhino sabbadukkham pahāya.  
これをもまた 断ち切って、 行く 慧者たちは、 期待なき者たちとなり、一切の苦しみを 捨棄して。  
Etampi=Etam/eta,etad(pron.a.n.sg.acc)これ+pi/ chetvāna/chindati(v.ger)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す vajanti/vajati(v.pr.3pl)  
[Sk.vrajati vraj]行く,達す dhīrā/dhīra(a.m.pl.nom)[ // ]堅固な,賢き,賢者,慧者,英賢, anapekkhino/anapekkhin(a.m.pl.nom)[an-  
apekkhin]期待なき,希望せざる←apekkhā:apekhā(f)[Sk.apekṣā]期待,待望,欲求,希望,愛情 sabbadukkham=sabba/sabba(a.代的 m.n  
持)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの+dukkham/dukkha(a.n.sg.acc)苦,苦痛,苦惱 pahāya/pahāya(v)[pajahati の ger]捨てて。

(24-6) Uggasenavattu ウッガセーナの物語(1) — 芸人の娘と結婚した長者の息子 348

muñca pureti imaṃ dhammadesanaṃ sathā veḷuvane viharanto uggasenaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、ウッガセーナについて語られたものである。

五百人の芸人たちが一年ごと、あるいは六か月ごとにラージャガハ市に行き、王が七日間の興行をさせると、たくさんの金銀を稼いだ、ということである。毎回、投げられる祝儀は計り知れなかった。

ある芸人の娘が竹の棒に上り、その上でとんぼ返りをして、その棒の端で空中を歩きながら踊ったり歌ったりした。そのとき、ウッガセーナという長者の息子が友人と一緒に重ねた寝台の上に立ってその娘を眺めて、彼女に心奪われ、家に帰って、「あの娘を得られたら、私は生きられよう。得られなければ、今ここで死ぬだけだ」と言って、食事を絶って床についた。

芸人の父親は、「私たちと一緒に巡業してください。そうしたら、彼に娘を与えましょう」と言った。息子は、両親が思いどまるようにどれほど頼んでも両親のこぼれを受け入れず、家を出て曲芸師のもとへ行ってしまった。

長者の息子は、「私も曲芸を習おう」と、舅のところへ行ったら彼の知っている曲芸を習い覚え、村や市場や王都で曲芸を見せて過ごすうちに、次第にラージャガハ市に戻ってきた。

その日、師は明け方に世間を観察されて、ウッガセーナがご自分の智の網の中に入ったのをご覧になり、「いったいこれはどういうことだろう」と念を集中されると、「長者の息子が曲芸を見せようと、竹の頂上に立つてあろう。彼を見るために、おおぜいの人々が集まるだろう。そこで私は、四行の詩句を唱えるだろう。それを聴いて、八万四千の衆生に法のありありとした理解があるだろう。ウッガセーナも阿羅漢果に到達するだろう」とお見通しになった。

師は市内に入り、観衆がウッガセーナを見ないようにし、自分だけを見るようにされた。ウッガセーナは観衆を見て、「観衆は私を見ていない」と暗い気持ちになり、「これは私が年数をかけてできるようになった曲芸だ。ところが、師が街に入ると、観衆は私を見ないで師だけを見ている。ああ、私が曲芸を見ることがむなしくなってしまった」と考えた。

師は彼の心を知って、マハー・モッガッラーナ長老に語りかけられ、「モッガッラーナよ、行って、長者の息子に、曲芸を見せてくださいと言いなさい」とおっしゃった。長老は行って竹の棒の下に立ち、長者の息子に語りかけて、次の詩句を唱えた。「さても見よ、曲芸師よ、大力あるウッガセーナよ、観衆のために演じたまえ、群衆を笑わせよ。」と。ウッガセーナは長老が語るのを聴くと喜びいさみ、「師が私の曲芸を見たがっておられるようだ」と、竹の棒の頂上に立ったまま、次の詩句を唱えた。「さても見よ、大智慧者、大神通力あるモッガッラーナよ、観衆のために演じよう、群衆を笑わせよう。」と。このように言うてから、竹の棒の頂上で空中に飛び上がり、空中で十四回のとんぼ返りをして降りて、棒の頂上に立った。

すると師は彼に、「ウッガセーナよ、賢者というものは、過去・未来・現在の物事への愛着を捨てて、生などからも解き放たれるために回るのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「348 前を解き放て、後ろを解き放て、真ん中を解き放て、生存から彼岸に行く者は、あらゆるところで心を解き放ち、ふたたび生と老の生存に赴かないだろう。」と。

法話が終わったとき、八万四千の衆生に法のありありとした理解があった。長者の息子も竹の棒の頂上に立ったまま、無碍解とともに阿羅漢果に到達し、竹の棒から降りて師の元へ行き、五体を地につけて礼拝し、師に出家を願い出た。すると、師は右手を伸ばされて、「来なさい、比丘よ」とおっしゃった。彼はその途端、八つの必需品を具えた法臘六十歳の長老のようになった。

すると、比丘たちは彼に、「ご同朋ウッガセーナよ、六十尺の竹の棒の頂上からあなたが下りるとき、恐怖はなかったのですか」と質問し、彼が、「ご同朋よ、私には恐怖はありませんでした」と答えると、比丘たちは師にそのことを告げた。「尊師よ、ウッガセーナは「私は恐れなかった」と、ありえないことを言って虚言を言っています。」

師は、「比丘たちよ、私の息子ウッガセーナのような、執着を断ち切った比丘たちは、恐れず怯えませんが」とおっしゃって、『婆羅門の章』の次の詩句を唱えられた。「397 あらゆる束縛を断ち切り、実に怯えることなく、結び目を超越し捉われのない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

過去物語——冗談から出たまこと

昔、〈十の力を持つお方〉カッサパ[仏]の黄金の仏塔が作られているとき、ある良家の娘と夫は一人の長老の鉢を受けとり、硬い食べ物、軟らかい食べ物で満たして長老の手に鉢を置き、二人とも誓願をした。「尊師よ、あなたさまが今生で覚られる法の分け前に与れますように。」その長老は煩惱を滅し尽くした阿羅漢だったので、未来を見通して彼らの誓願が成就することを知って微笑した。それを見て、女は夫に言った。「旦那さま、私たちのお上人さまが微笑されました。彼は芸人たちがありません。」夫も妻に、「妻よ、ほんとうにそうに違いない」と言って、出発した。

これが彼らの前世の行為である。彼らはそこで寿命の限り生きて神々の世界に再生し、今はそこから死没して、その女性は芸人の家に生まれた。男は長者の家に生まれた。彼は、「妻よ、ほんとうにそうに違いない」と妻に返事をしたために、芸人たちがいっしょに巡業したのである。煩惱を滅し尽くした長老に与えた鉢食のために、阿羅漢果を得た。その芸人の娘も、「私の夫が行くところが、私の行くところです」と出家して、阿羅漢果に到達した、ということである。

348. Muñca pure muñca pacchato, majjhe muñca bhavassa pāragū; Sabbattha vimuttamānaso, na punaṃ jātijaraṃ upehisi.  
 348.過去にあるものを解き放て（過去の記憶に振り回されない）ー 未来にあるものを解き放て（未来に期待せず願望を抱かない）ー 中間（現在）にあるものを解き放て（今この瞬間に執着の対象を作らない）ー [迷いの] 生存（有）の彼岸に至る者となり。一切所において、意が解脱した [あなた] は、ふたたび、生と老 [の輪廻] へと近づき行くことはないであろう。

No.211 (2012年9月) 心を打ちのめす時間 執着がなければ苦しみもなし Time tortures the mind

348.Muñca pure muñca pacchato, Majjhe muñca bhavassa pāragū; Sabbattha vimuttamānaso, Na punaṃ jātijaraṃ upehisi.

348.有(う)の辺際を知りし汝(なれ) 前際を断ち 後際(ごさい)断ち 現際も断ち 心解脱 再び生老(輪廻)を受けざらん  
 訳: 江原通子

未来を捨て 過去を捨て 存在のありさまを知り 現在も捨てる 一切より解放されし者にふたたび生老の流れはない 訳: ス  
 マナサーラ長老

ムンチャ プレー ムンチャ パッチャトー マッジュー ムンチャ バワッサ パーラグー  
 Muñca pure muñca pacchato, majjhe muñca bhavassa pāragū;  
 解き放て 過去にあるものを 解き放て 未来にあるものを 中間にあるものを解き放て 生存の 彼岸に至る者となり。  
 Muñca/muñcati(v.imper.2sg)脱す,のがれる,自由になる,放つ(言葉を) pure/pure(adv.prep)[pura:②の loc または Mg.nom 形]前に,  
 過去に muñca/ pacchato/pacchato(adv)[paccha の abl]後より,後に, majjhe/majjha(a.m.sg.loc)中の,中間の,現在の;中正の道,中  
 国.loc.majjhe 中間に muñca/ bhavassa/bhava(m.sg.gen)[ // <bhū]: ①有,存在,生存,繁栄,幸福② bhavati の imper  
 pāragū/pāragū[adj]gone beyond;passed;crossed;

サツバッタ ヴィムッタマーナソ ナ プナン ジャーティジャラン ウペーヒスイ  
 Sabbattha vimuttamānaso, na punaṃ jātijaraṃ upehisi.  
 一切所において、 解脱した[あなた]は、意が ないであろう。ふたたび、 生と老へと 近づき行くことは  
 Sabbattha/sabbattha: ①(m)[sabba-attha]一切義②(adv)[Sk. sarvatra]一切処に,いつでも,どこでも  
 vimuttamānaso=vimutta/vimutta(a)[vimuñcati の pp.Sk.vimukta]解脱した,解脱者+mānaso/mānasa(n→m.sg.nom)mānasāna(a)  
 [=manas]意,心意, na/ punaṃ/puna(adv.conj)[Sk.punar,punah]さらに,再び jātijaraṃ=jāti/jāti(f相)[ // cf.janati]生,誕生,生れ,血統,種  
 類+jaraṃ/jarā(f.sg.acc)jaras(n)[jī]老,老衰 upehisi/upeti(v.fut.2sg)[upa-i]ゆく,近づく,獲得する,到る。

(24-7) Cūḷadhanuggahapaṇḍitavatthu 小弓使い賢者の物語 349-350 ←参照 Culladhanuggaha-jātaka(374)  
vitakkamathitassāti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto cūḷadhanuggahapaṇḍitaṃ ārabha kathesi.  
この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある若い比丘について語られたものである。

ある若い比丘が、札食を配る堂で自分に割り当てられた札を取り、札食の粥をもらって食堂に行ったが、そこで水をもらえなかったため、水をもらうためにある家に行った。そこで一人の少女が彼を見て恋心を起こし、「尊師よ、また水がお入用のときは、ここへおいでください」と言った。

その比丘はそれ以来、水が得られないときはそこへ行った。少女も彼の鉢を受け取って、水を捧げた。そのようにして時が経つと粥も捧げ、またある日、そこにすわらせてご飯も捧げた。そして、比丘のそばにすわって、「尊師よ、この家には何でも、ないというものはありません。ただ、私たちは旅する人すらも見ないほど寂しいのですよ」と話を始めた。

若い比丘は数日彼女の話の聴いているうちに、俗世が恋しくなった。するとある日、客来の比丘たちが彼を見て、「ご同朋よ、どうしてあなたはやつれて顔色が悪くなっているのですか」と訊ねた。「ご同朋よ、私は俗世が恋しいのです」と答えると、比丘たちは彼を阿闍梨と和尚のもとへ連れて行った。阿闍梨と和尚は彼を師のところへ連れていき、事の次第を告げた。

師は、「比丘よ、俗世が恋しくなったというのはまことですか」とお訊ねになり、「まことでございます」と彼が答えると、「比丘よ、あなたは私のような勇猛心をおこしたブツダの教団で出家したのに、預流果なり一來果なりに自己を向けず、『俗世が恋しくなった』と言わせるとは、あなたの行為は重大です」とおっしゃって、「何が原因で俗世が恋しいのですか」とお訊ねになった。「尊師よ、ある女性が私にしかじかと話しました」と答えると、

「比丘よ、その女がそのようなことを言うのは、驚きではありません。彼女は過去世でも、全ジャンプ州で最高の弓使い賢者を捨てて、ひと目見ただけの男に恋心を起こし、彼を死に至らしめたのですから」とおっしゃって、そのことを明らかにするように比丘たちに懇願され〔過去の事を取り出され〕た。

#### 過去物語

昔、〔その比丘が〕小弓使い賢者だったとき、タッカシラーで世に名を知られた師匠のもとで技芸を習い、満足した師匠から妻として与えられた娘を連れてバーラーナシーに行く途中、ある荒野の入り口で五十本の矢で五十人の盗賊を殺し、矢が尽きたので、盗賊の頭を捕らえて地面に倒し、「妻よ、刀を持って来い」と言ったが、妻はその途端、盗賊を見て恋心を起こし、盗賊の手に刀の柄を持たせた。

盗賊は弓使い賢者を殺すと、彼女を連れて道を進んで行ったが、「この女は他の男を見ると、自分の夫を殺したように私を殺すだろう。こんな女に何の用があるのか」と考え、ある川を見ると、こちら岸に彼女を立たせ、〔彼女の装身具などの〕荷物を持って、「私が荷物を向こう岸に持っていくまで、おまえはここにいなさい」と言った。

女は〔盗賊が自分を〕そこへ残して行こうとしているのを知ると、〔次の詩句を唱えた。〕「すべての荷物をもって、婆羅門よ、あなたは向こう岸に渡った。軽い身で速く戻ってきてよ、今、私をこちらから渡らせておくれ。」〔泥棒はこれ聞いて、向こう岸に立って、次の詩句を唱えた。〕「馴染みのない私を、長く馴染んだ者と、お嬢さん、あなたは不確かなものを確かなものと取り替えた。お嬢さん、私をも他の男と取り替えるかもしれないね、私はここから遠いところへ行くよ。」

〔泥棒は「私はここから遠くに行くよ。お前は立っている」と、女が嘆き喚いても装身具の荷物を持って行ってしまった。愚かな女は近くのエーラガラー(キャンドル・ブッシュという熱帯の植物)の茂みに入って泣きながらすわった。そのとき、サッカは世界を観察していて、その女が、欲が大きすぎるために夫も愛人も失って泣いているのを見て、「あの女に恥をかかせ、物笑いのたねにしてから戻ってこよう」と考え、御者のマータリと楽人パンチャシカを連れてそこへ行き、川岸に立って、「マータリよ、おまえは魚になれ。パンチャシカよ、おまえは鳥になれ。」と命じた。サッカはジャッカルになって、肉片を口にくわえて彼女から見える所に行った。魚は水から飛び上がり、ジャッカルの前には落ちた。ジャッカルは口にくわえた肉片を捨てて、魚を取ろうと跳びかかった。魚は撥ねて水に落ち、鳥は肉片をくわえて空に飛び上がった。ジャッカルは肉も魚も失って、エーラガラーの茂みを見ながら落胆した様子ですわった。女はそれを見て、「欲張りすぎて肉も魚も得られなかったわ」と、水瓶も割れるかというほどの大笑いをした。それを聞いて、ジャッカルは次の詩句を唱えた。〕

「エーラガラーの茂みでアハハと笑うのは誰だ、ここには踊りも歌も上手に合わせる楽器もない、尻の美しい女よ、笑うときでもないのに、何を笑うのか、美しい人よ。」

〔これを聞いて、女は次の詩句を唱えた。〕「頭の弱い愚かなジャッカルよ、お前は知恵が足りない、ジャッカルよ、魚と肉片とを失って、落ちぶれた人のように落胆する。」

〔すると、ジャッカルが次の詩句を唱えた。〕「他人の落ち度はよく見える、ところが自分の落ち度は見えにくい、夫と愛人をも失って、お前は落胆しているように見えるがなあ。」

〔すると、女が次の詩句を唱えた。〕「まったくその通り、獣の王よ、おまえの言った通り、ジャッカルよ、この私はこれから行って、夫に従順な女になろう。」

〔すると、神々の王サッカが次の詩句を唱えて戒めた。〕「土の器を盗むものは、青銅の器も盗むだろう、お前はすでに悪いことをした、今また同じことをするだろう。」と。

この「ジャータカ第五篇」中の「小弓使い賢者前生物語」Culladhanuggaha-jātaka(374)を詳しく語られて、「そのとき、小弓使い賢者はあなたでした。女は、この今の少女でした。ジャッカルは姿をやってきて、女に間違っていることを示した神の王は、この私でした」とおっしゃって、「このようにその女は、その一瞬見ただけの男への恋心から、全ジャンプ州で最高の賢者の命を奪いました。その女について起こったあなたの執着を断ち切って、取り除きなさい、比丘よ」と彼を戒め

て、さらに法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「349 思いにかき乱された人は、激しい愛欲を清らかだと見なし、ますます執着が増大する、彼は実に束縛を堅くする。」「350 思いを静めることを楽しむ人は、常に意識して不浄観を修習する、彼は実に執着を取り除き、彼は悪魔の束縛を断ち切る。」と。

法話が終わったとき、その比丘は預流果に確実に立った。居合わせた人々にとっても法話は意義深いもので

349. Vitakkamathitassa jantuno, tibbarāgassa subhānupassino; Bhiyyo taṇhā pavaḍḍhati, esa kho daḷhaṃ [esa gāḷhaṃ (ka.)] karoti bandhanam.

349. 転倒した思考の人に、強き貪欲の者に、浄美の随観者（不浄のものを「美しく価値がある」と見る者）に、渴愛〔の思い〕は、より一層、増え行く。この者は、まさに、結縛を堅固に作り為す。

No.212 (2012年10月) 妄想はなぜ悪いの？ 思考・妄想は煩惱の産物 Free thinking is not possible

349 Vitakkamathitassa jantuno Tibbarāgassa subhānupassino Bhiyyo taṇhā pavaddhati Esa kho daḷhaṃ karoti bandhanam.

350 Vitakkūpasame ca yo rato Asubhaṃ bhāvayate sadā sato Esa kho byanti kāhiti Esa checchati mārabandhanam.

349 尋(じん)に乱され貪強く 貪を淨しとみる人は 愛欲更に増大し その結縛(いましめ)を更に増す

350 尋の寂止を悦びて 不浄観をばよくつとめ 常に念(サティ)をば保つ人 魔神の縛(いましめ)断ち切らん 訳：江原通子

349 貪欲に支配され、思考に乱れ世を美化して観る人に 渴愛は増大し 執着は強化される

350 もっぱら思考を制御して常に気づき 「美のものならず」と思う 彼は渴愛を減して 死王の束縛を断ち切る 訳：スマナサラ長老 (Dhammapada 349,350)

ヴィタツカパマティタツサ ジャントウノー ティツバラーガツサ スパーヌパツスィノー

Vitakkapamathitassa jantuno, tibbarāgassa subhānupassino;

転倒した思考の 人に、 強き貪欲の者に、 浄美の随観者に、

Vitakkamathitassa=Vitakka/vitakka(m 有持)[Sk.vitarka]尋,尋求,覚,思惟,考想+mathitassa/mathita(a.m.sg.gen)[mathati の pp]攪拌せる,かきまぜた;混乱せる.顛倒した←mathati(v)[math,manth]攪拌す,かきまぜる,混乱す pp.mathita 混迷せる

jantuno/jantu(m.sg.gen)[ // ]: ①人,有情②草, tibbarāgassa=tibba/tibba(a 有持)=tipa 重き,はげしき-rāga 苦貪

+rāgassa/rāga(m.sg.gen)[ // cf.rajati]貪,貪欲,染;染色,色彩 subhānupassino=subha/subha(a.n 依属)[Sk.śubhas <subh]浄,清浄の,美しき,幸福の+anupassino/anupassin(a.m.sg.gen)[cf. anupassati]随観する,観察する;

ビツヨー タンハー パワツダティ エーサ コー ダルハン カローティ バンダナン

Bhiyyo taṇhā pavaddhati, esa kho daḷhaṃ karoti bandhanam.

より一層、 渴愛は、 増え行く。 この者は、 まさに、 堅固に 作り為す。 結縛を

Bhiyyo/bhiyyo(a.adv)[= bhīyo,bhīyyo.cf.Sk.bhūyas.bhū(bahu)の比較級形]より多き,さらに多く taṇhā/taṇhā(f.sg.nom)

[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲 pavaddhati/pavaddhati(v.pr.3sg)[pa-vr̥dh]増大する,生長する, esa/eta,etad(pron.a.m.sg.nom)これ

kho/kho(adv)[Sk.khalu]実に daḷhaṃ/dalha(a.n.sg.acc)堅固の,確固たる karoti/karoti(v.pr.3sg)[kr]なす,行う,作る

bandhanam/bandhana(n.sg.acc)[ // ]縛,捕縛,結縛,拘束,接目,結節。

350. Vitakkūpasame ca [vitakkūpasameva (ka.)] yo rato, asubhaṃ bhāvayate sadā sato; Esa [eso (?)] kho byanti kāhiti, esa [eso (?)] checchati mārabandhanam.

350. しかしながら、彼が、思考の寂止に喜びある者であり、不浄〔の表象〕（不浄想：身体を不浄と見る観察）を修める、常に気づきある者であるなら、

ヴィタツクーパーサメー チャ ヨー ラトー アスバン バーワヤテー サダー サトー

Vitakkūpasame ca yo rato, asubhaṃ bhāvayate sadā sato;

思考の寂止に しかしながら、彼が、喜びある者であり、 不浄を 修める、 常に 気づきある者であるなら、

Vitakkūpasame=Vitakka/vitakka(m 依属)[Sk.vitarka]尋,尋求,覚,思惟,考想+upasame/upasama(m.sg.loc)[Sk.upasama]寂靜,寂止,休息,止息 ca/ yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]～である人,～であるもの rato/rata(a.m.sg.nom)[ramati ram の pp]楽しめる,愛好せる,

asubham/asubha(a.n.sg.acc)[a-subha]不浄の-bhāvanā 不浄観 bhāvayate/bhāveti(v.pr 反照態 3sg)[bhāvati bhū : caus]あらしむ,修習す,修す[increases;cultivates;develops 増加する;耕す;発展させる] sadā/sadā(adv)[ // ]常に sato/sata : ①(num.n.a)[Sk.śatam]百,多くの②(a.m.sg.nom)[sarati smr: pp.,Sk.smr̥ta]憶念せる,念の,念あり,具念,正念の③(a)[=sat <as:pp]正,善,妙の;

エーサ コー ビヤンティ カーヒティ エーサ チェツチャティ マーラバンダナン

Esa kho byanti kāhiti, esa checchati mārabandhanam.

この者は、 まさに、 [貪欲]終息を 為すであろう。 この者は、 断ち切るであろう。 悪魔の結縛を

Esa/eta,etad(pron.a.m.sg.nom)これ kho/kho(adv)[Sk.khalu]実に byanti/byanti:=vyanti←vyanti-(a.n 依対)[=vyanta,byanta <vianta]遠き,終結,終末① vyantikaroti(v) 除く,亡ぼす,終滅さす② vyantibhavati,-hoti(v)止む,終る,滅ぶ kāhiti/karoti(v.fut.3sg)[kr]なす,行う,作る, esa/ eta,etad(pron.a.m.sg.nom)これ checchati/chindati(v.fut.3sg)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す fut.checchati

mārabandhanam=māra/māra(m 依属)魔,悪魔,魔羅,魔王,死神-bandhana 魔縛+bandhanam/bandhana(n.ag)[ // ]縛,捕縛,結縛,拘束,接目,結節。

(24-8) Māravatthu 魔王マーラの物語 (3) — ラーフラ長老に恐怖を起こさせようとしたマーラ 351-352

Niṭṭhaṅgatoti imaṃ dhammaḍḍesaṇaṃ sathā jetavane viharanto māraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、魔王マーラについて語られたものである。

ある日、時ならぬ時刻に、何人かの長老たちがジェータヴァナ精舎に入り、〔ブッダの息子〕ラーフラ長老が住んでいる所に行き、〔ラーフラ長老を〕起こした。ラーフラ長老は他に寝る場所がなかったので、行って如来の香房(ブッダの居室)の前で寝た。そのとき、ラーフラ尊者は阿羅漢果に到達していたが、法臘(具足戒を受けてからの年数)八歳であった。

マーラ・ヴァサヴァッティン(強力な者、マーラの綽名)は本来の姿で現れて、ラーフラ尊者が香房に向かって寝ているのを見て考えた。「修行者ゴータマの痛む親指のように、息子が外に寝ている。自分は香房のなかですわっていても、〔ラーフラの〕親指が痛んだら、自分の親指も痛むだろう。」

マーラは大きな象王の姿に変身して近づき、鼻をラーフラ長老の頭に巻きつけて、大声で法螺貝の叫びのように啼いた。師は香房の中ですわっておられたが、それがマーラの仕業であるを知って、「マーラは、彼のような私の息子が十万人いても、恐怖を起こさせることはできません。私の息子は恐れがなく、執着を離れ、大勇猛心があり、偉大な智慧があるのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「351 覚りの境地に達し、恐れがなく、執着を離れ、汚れがない、生存の矢を断ち切り、これが最後の身体である。」「352 執着を離れ、しがみつくとなく、〔教えの〕言い回しや言葉をよく知り、音節のつながりと、前後の脈絡を知るならば、彼は最後の身体を持つものであり、大智者、偉大な人と言われる。」と。

法話が終わったとき、おおぜいの人々が預流果などを獲得した。悪しき者マーラも「修行者ゴータマは私だとわかってい」と、その場で姿を消した。

351. Niṭṭhaṅgato asantāsī, vītatāho anaṅgaṇo; Acchindi bhavasallāni, antimoyaṃ samussayo.

351. 究極〔の境地〕に赴き、恐慌せず、渴愛を離れ、穢れなき者は、諸々の〔迷いの〕生存の矢を断ち切った。これは、最後の積身である(死後、涅槃に行く)。

No.213 (2012年11月) 覚ったらどうなるの? 智者の心の中身 How does the stilled mind work?

351. Niṭṭhaṅgato asantāsī, vītatāho anaṅgaṇo; Acchindi bhavasallāni, antimoyaṃ samussayo.

352. Vītatāho anādāno, Niruttapadakovidō; Akkharānaṃ sannipātaṃ, Jaññā pubbāparāni ca; Sa ve antimasārūro, Mahāpaṇṇo mahāpurisoti vuccati.

351. 境地円成おそれなし 欲を離れて汚点なし 生存の箭を断ち切りし これこそ彼の最後身

352. 渴愛離れ 無執着 聖典(パーリ)の語義に通曉し 文字結合を熟知すは 最後身をば具する人 大智者、大丈夫と稱せらる 訳: 江原通子

352. 渴愛を離れ、執着がなく 言葉と語法に精通し もろもろの文字の集合と 前と後をよく知るならば かれこそ最後の身体を持つ者 大智者、偉大な人と言われる 片山一良『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版425p

ニッタンガトー アサンターシー ヴィータタンホー アナンガノー

Niṭṭhaṅgato asantāsī, vītatāho anaṅgaṇo;  
究極〔の境地〕に赴き、 恐慌せず、 渴愛を離れ、 穢れなき者は、

Niṭṭhaṅgato=niṭṭhaṇ/niṭṭhā(f.sg.acc)[Sk.niṣṭhā]: ①依止, 依憑, 基礎 ②究竟, 終結, 目的 niṭṭhaṃ gacchati 究竟に至る

+gato/gata(a.m.sg.nom)[gacchati gam:pp]行ける, 達せる, 関係せる; 様子, 姿 asantāsī=a/+santāsī/santāsī(a.m.sg.nom)[santāsa-in]恐ろしき←santāsa(m)[<sam-tras]戦慄, 恐怖, vītatāho=vīta/vīta(a 有持): ①[vi-ita<i]のpp(a)離れたる, なき-taṇha 離愛の②(a)[vāyati vā @vināti vi]のpp織られた+taṇho/taṇhā(f)[Sk.ṭṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛, 愛, 愛欲 anaṅgaṇo/anaṅgaṇa(a.m.sg.nom)[an-aṅgaṇa]無穢の;

アッチンディ バワサッラーニ

Acchindi bhavasallāni,

断ち切った。 諸々の〔迷いの〕生存の矢を

アンティモーヤン

antimoyaṃ

最後の

サムッサーヨ

samussayo.

積身である (死後、涅槃に行く)。

Acchindi/chindati(v.aor.3sg)[chid, chind, ched]切る, 断つ, 切断 bhavasallāni=bhava/bhava(m 依属)[ // <bhū]: ①有, 存在, 生存, 繁荣, 幸福-salla 有箭 ② bhavati の imper+sallāni/salla(n.pl.acc)[Sk.śalya]矢, 箭, 刺箭, 投鎗, 樹名, antimoyaṃ=antimo/antima(a.m.sg.nom)[antaの最上級]最終の, 最後の+yam/ya(関代 n.sg.nom)[Sk.yah]~である人, ~であるもの samussayo/samussaya(m.sg.nom)[<sam-ud-śri Bsk.samucchraya]集積, 身体, 合成。

352. Vītaṅho anādāno, niruttipadakovidō; Akkharānaṃ sann/ipātaṃ, jaññā pubbāparāni ca; Sa ve “antimasārīro, mahāpañño mahāpuriso”ti vuccati.

352. 渴愛を離れ、執取なく、語と句の熟知者として、しかし、諸々の文字の配列と前後〔関係〕を知るなら、彼は、まさに、「最後の肉体ある者（解脱者）」「大なる智慧ある者」「大なる人士たる者」と呼ばれる。

ヴィータタンホー      アナーダーノー      ニルッティパダコーヴィドー

Vītaṅho                      anādāno,                      niruttipadakovidō;

渴愛を離れ、              執取なく、              語と句の熟知者として、しかし、

Vītaṅho=vīta/vīta(a 有持): ①[vi-ita<i の pp](a)離れたる,なき-taṅha 離愛の②(a)[vāyati vā ①,vināti vi の pp]織られた  
+taṅho/taṅhā(f→m.sg.nom)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲 anādāno/anādāna(n→m.sg.nom)[an-ādāna]無取,無取者,  
niruttipadakovidō=nirutti/nirutti(f相)[Sk.nirukti]詞,辞詞,言語-pada 詞句+pada/pada(n 依対)足;足跡,歩;句,語法  
+kovidō/kovidā(a.m.sg.nom)[<ku-vid]熟知する,識知する;

アッカラーナン      サンニパータン      ジャンニャー      プッバーパラーニ      チャ

Akkharānaṃ              sannipātaṃ,              jaññā              pubbāparāni              ca;

諸々の文字の              配列と              知るなら、              前後〔関係〕を

Akkharānaṃ/akkhara[Sk.akṣara](a)不滅の,永遠の(n.pl.gen)字,文字,字母 sannipātaṃ/sannipāta(m.sg.acc)[<sannipatati]集合,結合,  
和合,合致,配列, jaññā/jaññā(v.3sg)[jānāti の opt]知る:期待~なるように/希望~してほしい/許可~すべし/願望~したい/見込み  
~できる,~であろう/条件:もし~なら pubbāparāni=pubba/pubba: ①(m)[cf.Sk.pūya]膿,うみ,膿汁②(a 代的相)[Sk.pūrva]前の,先  
の,昔の-āpara 前後+aparāni/aparā(a 代的 n.pl.acc)後の,次の,他の ca/;

サ      ヴェー      アンティマサーリーロー      マハーパンニョー      マハープリソー      ティ      ウッチャティ

Sa      ve      “antimasārīro,              mahāpañño              mahāpuriso”              ti      vuccati.

彼は、まさに、「最後の肉体ある者（解脱者）」      「大なる智慧ある者」      「大なる人士たる者」と呼ばれる。

Sa/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,その,彼女 ve/ve(adv)実に sa ve bālo ti vuccati 彼は実に愚者と言わる cf.have

“antimasārīro=antima/antima(a 有持)[anta の最上級]最終の,最後の-sarīra 最後身+sārīro/sarīra(n→m.sg.nom)[Sk.śarīra]身,身体; 舍  
利,遺身,遺骸,遺骨-āntima 最後身, mahāpañño=mahā/mahant(a 有持)大なる,偉大の+pañño/paññā(f→m.sg.nom)

[Sk.prajñā.cf.pajānāti]般若,慧,智慧 mahāpuriso=mahā/mahant(a 持)大なる,偉大の+puriso/purisa(m.sg.nom)[Sk.puruṣa]人,男,男子,  
丈夫,人間,神我”ti/ vuccati/vuccati:vuccate(v.pr.3sg)[vac:pass]言われる。

(24-9) Upakāṅkavavathu アージーヴィカ教徒ウパカ物語 353

Sabbābhībhūti imaṃ dhammesaṇaṃ sathā antarāmagge upakaṃ ājīvaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がアージーヴィカ教徒のウパカについて語られたものである。

あるとき、師は一切智者の智(覚り)を得て覚りの座で七週間を過ごされたのち、鉢と衣を持って、初転法輪(最初の説法)のためにバーラーナシー市に向かって八十ヨージアナの旅を始められたが、途中でウパカというアージーヴィカ教徒に出会われた。

ウパカも師を見て、「ご同肌よ、あなたの感官は実に澄み渡っています。皮膚の色は美しく輝くようです。ご同明よ、誰を師として出家したのですか。あなたの師は誰ですか。あなたは誰の教えを奉じているのですか」と訊ねた。

すると、師はウパカに、「私には和尚も阿闍梨もいません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「353私はすべてに勝ちすべてを知る、すべての物事に染まらず、すべてを捨て、執着を滅して、解放されている、自ら覚った者は誰を奉ずべきだろうか。」と。

法話が終わったとき、ウパカは如来の言葉に喜びもせず、怒りもせず、頭を振りながら舌を出し、脇道を通ってどこかの獵師の住処へと去っていった。

353. Sabbābhībhū sabbavidūhamasmi, sabbesu dhammesu anūpalitto; Sabbañjaho taṇhakkhaye vimutto, sayam abhiññāya kamuddiseyyam.

353.わたしは、一切を征服する者として、一切を知る者として、一切の諸法(事象)に汚されない者として、[世に]存している。一切を捨棄する者は、渴愛の滅尽(涅槃の境処)において解脱した者は、自ら証知して、誰を、[師と]定めよう。

No.214 (2012年12月)なぜ唯我独尊? 一切智者の意味 Absolute personality

353.Sabbābhībhū sabbavidūhamasmi, Sabbesu dhammesu anūpalitto; Sabbañjaho taṇhakkhaye vimutto, Sayam abhiññāya kamuddiseyyam

353.一切勝利者一切知 一切諸法に穢されず 自ら証知 一切捨 滅尽渴愛解脱せし 我は誰をか師とはせん 訳:江原通子

サバービブー サッバヴィドゥーハマスミ サッベース ダンメース アヌーパリットー  
Sabbābhībhū sabbavidūhamasmi, sabbesu dhammesu anūpalitto;  
一切を征服する者として、一切を知る者として、わたしは、一切の諸法に汚されない者として、存している。  
Sabbābhībhū=Sabba/sabba(a.代的 m.n 依処)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの+abhihū/abhibhū(n.a.m.sg.nom)[cf.abhibhavati]  
勝利,征服せる sabbavidūhamasmi=sabba/sabba(a.代的 m.n 依処)+vidū/vidū: ①(a.m.sg.nom)[Sk.vidu]賢き,賢明の;知者②vindati  
の pf+aham/aham(人代 sg.nom)私+asmi/atthi: ①(v.pr.1sg)[Sk.asti<as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在, sabbesu/sabba(a.代  
的.n.pl.loc) dhammesu/dhamma(m.n.pl.loc)法,教法,真理,正義 anūpalitto/anūpalitta=anupalitta←anupalitta(a.m.sg.nom)[an-upalitta]  
不染著の,取著なく;

サッバンジャホー タンハッカイエー ヴィムットー サヤン アビンニャーヤ カムッディセツヤン  
Sabbañjaho taṇhakkhaye vimutto, sayam abhiññāya kamuddiseyyam.  
一切を捨棄する者は、渴愛の滅尽において 解脱した者は、自ら 証知して、誰を、[師と] 定めよう。  
Sabbañjaho=Sabbañ/sabba(a.代的 m.n.sg.acc)+jaho/jaha: ①(a.m.sg.nom)[jahati]捨てる,断ずる②(v)jahati:imper.2sg  
taṇhakkhaye=taṇha/taṇhā(f)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲+k/khaye/khaya(m.sg.loc)[Sk.kṣaya]尽,尽滅,滅尽  
vimutto/vimutta(a.m.sg.nom)[vimuñcati の pp.Sk.vimukta]解脱した,解脱者, sayam/sayam(adv)[Sk.svayam]自ら,自分で  
abhiññāya/abhiññāti(v.ger)[abhi-jñāti] 証知する,自証する kamuddiseyyam=kam/ka(pron.interr 疑代 m.sg.acc)[Sk.kah]  
(m)ko(f)kā(n)kim 何,誰,どの+uddiseyyam/uddisati(v.opt.反照態 1sg)[ud-disati] 指摘す/指定す/説戒す/誦説す[布薩に]

(24-10) Sakkapañhavatthu サッカの質問の物語 354 ←参照 DN11.Kevāṭṭasuttaṃ ケーヴァッタ経

Sabbadānanti imaṃ dhammaḍḍesaṇaṃ satthā jetavane viharanto sakkam devarājanam ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、神々の王サッカについて語られたものである。

あるとき、三十三天の神々が集まって四つの質問を発した。「布施にはどんな種類があるのか。味にはどんな種類があるのか。楽しみのうち、どの楽しみが最も勝れているのか。執着を減らすことがどうして最も勝れているのか」と。

これらの質問に、どの神も結論を下すことができなかった。一人の神がもう一人の神に質問し、その神が別の神に質問しと、次々に質問し、このようにして十のチャッカヴァーラ世界で十二年間も質問し続けた。それだけの時をかけても、これらの質問の答えが見つけれなかったため、一万チャッカヴァーラ世界の神々が集まって四大天王のもとへ行き、みなさん、おおぜいの神々が集まっているのはどういうわけですか」と訊ねられると、「四つの質問が発せられたのですが、答えを出すことができないので、あなたさまがたの元へ来ました」と言った。「みなさん、その質問とはどんなものですか。」「布施と味と楽しみのうち、どの布施と味と楽しみが最も勝れているかということと、執着を減らすことがどうして最も勝れているかという、これらの質問に結論を出すことができないので、我々は来たのです。」四大天王たちは、「みなさん、私たちもそれらの質問の答えを知らません。しかし、我々の王〔サッカ〕は千人の考えたことを察知すると、たちどころに理解します。彼は我々より智慧も福德も勝れています。さあ、彼のもとへ行きましょう」と言って、その神々の群れを連れて、神々の王サッカのもとへ行った。

サッカも、「みなさん、このおおぜいの神々の群れはどういうわけですか」と訊ねたので、神々はそれまでの経緯をいきまっつ話すと、サッカは、「これらの質問に、他の者は答えを出すことができません。これらの質問はブッダの領域です。師は今どこに滞在しておられますか」と訊ねた。「ジェータヴァナです」という答えを聞くと、サッカは、「さあ、師の元へ行きましょう」と、神々の群れとともに、夜、ジェータヴァナ全体を光で満たして師に近づき、礼拝して片側に立った。

「大王よ、どうして大きな神々の群れとともに来たのですか」と師に問われると、サッカは、「尊師よ、神々の群れがこれらの質問を発しました。他に答えを知ることができる者はいません。私たちにこれらの質問の答えを明らかにしてください」と言った。

師は、「わかりました、大王よ。私は諸々の波羅蜜を完成して、大いなる捨施をほどこしたので、あなた方のような者たちの疑念を晴らす一切智者の智を獲得しました。あなた方が質問した問いのうち、あらゆる布施のうち法の布施が最も勝れています。あらゆる味のうち法の味が最も勝れています。あらゆる楽しみのうち法の楽しみが最も勝れています。しかし、執着を断ち切ることは、阿羅漢果を獲得させるものですから、とりわけ勝れているのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「354法の布施はあらゆる布施に勝つ、法の味はあらゆる味に勝つ、法の楽しみはあらゆる楽しみに勝つ、執着を断ち切ることはあらゆる苦しみに勝つ。」と。

この詩句で、「法の布施はあらゆる布施に」とは、もしチャッカヴァーラ世界の中から梵天界に至るまであらゆる所にすわっているブッダ、独覚、阿羅漢たちに、バナナの蕾に等しい〔小さい〕衣を布施して、それを受け取る時に四行の詩句で述べられる感謝の法話は勝れている。その布施は、法話の詩句の十六分の一にも値しない。このように法の説示も、唱えることも、聴くことも大きい。

その聞法〔の会〕を主催する人が得る福德は、そのような会衆が上等の布施食を鉢に満たして捧げた布施よりも大きく、ギーや胡麻油などを鉢に満たして捧げられた菓の布施よりも大きく、マハーヴィハーラ(アヌラーダプラの大精舎)に等しい精舎や金銅講堂に等しい講堂を何十万と作らせて布施した座臥処の布施よりも大きく、アナータピンディカ長者などによる〔ジェータヴァナ〕精舎を始めとして捧げられた捨施よりも、四行の詩句による感謝の法話の残りによって与えられる法の布施のほうが勝れている。

何故かという、このような福德を積んでいる者は、法を聴いたから行うのであって、聴かなかったら行わないであろう。もしこれらの衆生が法を聴かなければ、一匙の粥も、杓子一杯のご飯も布施しないであろう。このような理由で、これらの布施よりも法の布施が勝れているのである。

また、ブッダたち、独覚たちを別として、全世界に降った雨の雫の数を数えることができる智慧を具えたサーリプッタなどでも、自分一人の力では預流果などを実現することはできなかったであろう。アッサジ長老などによって説かれた法を聴いて預流果をありありと理解し、師の法話によって弟子のうち最高の智慧を獲得したのである。それゆえ、「法の布施はあらゆる布施に勝つ」と説かれたのである。

また、サトウキビの味などから上は上等な神の食べ物味までも、輪廻の輪に衆生を落としこみ、苦を味わう原因となる。しかし、三十七の覺りに導く法の集まり(三十七菩提分法)であり、九つの超世間の法の集まりであるこの法の味は、あらゆる味のうちで最上である。それゆえ、「法の味はあらゆる味に勝つ」と説かれたのである。

また、息子の楽しみ、娘の楽しみ、財宝の楽しみ、女性の楽しみ、踊り・歌・演奏などの区別がある無数の種類の楽しみも、輪廻の流転に落として苦しみを味わう原因になる。しかし、この法を説き、あるいは聴くことは、内に生じて喜びの最高の状態を生み、涙をながして身体の毛羽立ちを生じさせる、この輪廻の流転を終わりにして阿羅漢果に到達するという、このような法の楽しみがすべての楽しみのうちで最も勝れている。それゆえ、「法の楽しみはあらゆる楽しみに勝つ」と説かれたのである。

「執着を断ち切る」とは、執着が減り尽くすとき、阿羅漢果に到達する。それはすべての存在する苦しみに打ち勝つ最上のものである。それゆえ、「執着を断ち切ることはあらゆる苦しみに勝つ」と説かれたのである。

師がこれらの詩句によって答えを説くにつれて、八万四千の衆生に法のありありとした理解があった。サッカも法話を聴いて、師を礼拝して言った。「尊師よ、そのように最も勝れた法の布施がある時、どうして我々に利益の回向を与えさせてくださらないのでしょうか。今からは比丘サンガに法を説かれたら、われわれに利益の回向を与えさせてください、尊師よ。」

師はサッカのこぼれお聞きになって、比丘サンガを参集させて、「比丘たちよ、今日からは大きな開法会であれ、個別の開法会であれ、小さい開法会であれ、あるいは〔食事の布の後に行く〕感謝の法話であれ、法を語ったときは、あらゆる衆生に回向を得させなさい」とおっしゃった。

354. Sabbadānaṃ dhammadānaṃ jināti, sabbarasaṃ dhammaraso jināti; Sabbaratiṃ dhammarati jināti, taṇhakkhayo sabbadukkhaṃ jināti.  
 354.法(真理)の施しは、一切の施しに勝つ。法(真理)の味わいは、一切の味わいに勝つ。法(真理)の喜びは、一切の喜びに勝つ。渴愛の滅尽は、一切の苦しみに勝つ。

No.215 (2013年1月) 優勝を決める方法 世論と仏教の対立 What is best?

354.Sabbadānaṃ dhammadānaṃ jināti, Sabbarasaṃ dhammaraso jināti; Sabbaratiṃ dhammarati jināti, Tanhakkhayo sabbadukkhaṃ jināti.

法施(ほっせ)はすべての施にまさり 法味はすべての滋味に勝ち 法悦すべての喜びにまさる 渴愛の尽(じん)ありとあるすべての苦惱に勝利する 訳: 江原通子

サツバダーナン	ダンマダーナン	ジナーティ	サツバラサン	ダンナラソー	ジナーティ
Sabbadānaṃ	dhammadānaṃ	jināti,	sabbarasaṃ	dhammaraso	jināti;
一切の施しに	法(真理)の施しは、	勝つ。	一切の味わいに	法(真理)の味わいは、	勝つ。

Sabbadānaṃ=sabba/sabba(a.代的 m.n 持)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの+dānaṃ/dāna(n.sg.acc)施,布施,施与  
 dhammadānaṃ=dhamma/dhamma(m.n 依属)法,教法,真理,正義-dāna 法施+dānaṃ/dāna(n.sg.nom) jināti/jināti:=jayati(v.pr.3sg)勝つ,  
 sabbarasaṃ=sabba/sabba(a.代的 m.n 持)+rasaṃ/rasa(m.sg.acc)味,食味,汁,液; 作用,実質 dhammaraso=dhamma/dhamma(m.n)法,教法,真理,正義-rasa 法味+raso/rasa(m.sg.nom) jināti/;

サツバラティン	ダンマタティ	ジナーティ	タンハッカヨー	サツバドゥッカナン	ジナーティ
Sabbaratiṃ	dhammarati	jināti,	taṇhakkhayo	sabbadukkhaṃ	jināti.
一切の喜びに	法(真理)の喜びは、	勝つ。	渴愛の滅尽は、	一切の苦しみに	勝つ。

Sabbaratiṃ=Sabba/sabba(a.代的 m.n 持)+ratiṃ/rati(f.sg.acc)[// <ram]楽,喜楽 dhammarati=dhamma/dhamma(m.n 依属)  
 +rati/rati(f.sg.nom) jināti/, taṇhakkhayo=taṇha/taṇhā(f 依属)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲-kkhaya 愛尽,愛の滅尽+k/  
 +khayo/khaya(m.sg.nom)[Sk.kṣaya]尽,尽滅,滅尽 sabbadukkhaṃ=sabba/sabba(a.代的 m.n 持)+dukkhaṃ/dukkha(a.n.sg.acc)苦,苦痛,  
 苦惱 jināti/.

(24-11) Aputtakasetṭhivathu 息子がいない長者の物語 355 ←参照 Mayhaka-jātaka(390)

Hananti bhogāti imaṃ dhammaḍesaṇaṃ satthā jetavane viharanto aputtakasetṭhiṃ nāma ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、息子がいない長者について語られたものである。

その長者が死んだと聞いて、コーサラ国王パーセナディは、「息子がいない者の財産は誰のものになるのか」と訊ね、「王のものです」と聞き、七日かけて彼の家から財宝を王宮に運び込ませてから、師のもとへ行った。

師が、「おや、大王よ、どうしてあなたは真昼間に来たのですか」とおっしゃると、王は、「尊師よ、ここサーヴァッティー市で長者家長が死にました。私は息子のいなかった彼の財産を王宮の中庭に運び込ませてから来ました」などと話した。話の全体は経にあるように知るべきである。[SN3-19 Paṭhamaaputtakasuttaṃ 第一の子なき者の経,第一の無子経]

「彼は金の皿に盛られたさまざまな最高の味の食べ物を持ってこられても、『このようなものを人々は食べているのか。どうしてお前たちはこの家で私とふざけようというのか』と言って、食事が供されても土塊や棒きれなどで召使いたちを打って追い払い、『これが人間の食べ物だ』と、屑飯や酢粥をおかずにして食べた。衣服、乗り物、日傘も美しいものが出されると、それを持ってきた人々を土塊や棒きれなどで打って追い払い、麻を着て、古びた車で行き、棕櫚の葉の日傘を差し掛けさせて歩いたのです」と、このように王が説明すると、師は長者の過去世の行為を語られた。

過去物語

大王よ、昔々、その長者家長はタガラシキンという独覚に鉢食を捧げた。「修行者に鉢食を与えなさい」と〔家人に〕言ってから、座から立ち上がり出かけていった。

この信心のない愚か者がそのように言って出ていったとき、彼の妻は信心を具えていたので、「まあ、あの人の口か『与えなさい』という言葉聞くのはなんと久しぶりのことでしょう。今日、私の心の望みが叶うように、鉢食を捧げましょう」と、独覚の鉢を受け取って、上等の食べ物で満たして捧げた。

夫は帰ってきたとき、それを見て、「修行者よ、何かもらったか」と、独覚の鉢を取り、上等な食べ物を見て後悔し、こう思った。「この鉢食は奴隷たちが召使いたちが食べたほうが良かった。彼らはこれを食べ、私のために仕事をするだろう。しかし、この男は帰って食べてから眠るだろう。私の鉢食は無駄になった」と。

彼はまた、財産のために兄弟の一人息子(甥)の命を奪ったのだった。甥は彼の指を握って歩きながら、「これはぼくの父上の乗り物、これは父上の牛だ」などと話した。すると長者は、「今ですら、こやつはこのように言う。彼が成長したとき、この家の財産を誰が見ることになるだろう」と考えて、甥を森へ連れていき、とある茂みの根元で首を捕らえ、大根を切るように首を切って殺し、首を掴んで振って、その場に投げ捨てた。これが彼の過去世の行為である。それゆえ〔次のように〕言われる。

「大王よ、実にその長者家長はタガラシキン独覚に食事を捧げた、その行為の果報によって、七たび良い生まれ変わりをし、天界に生まれました。その行為の果報の残りのために、このサーヴァッティー市で七たび長者の地位につきました。大王よ、実にその長者家長は布施をしたのち、後悔しました。「この鉢食は奴隷たち、あるいは召使いたちが食べたほうがよかった」と。その報いにより、彼は豊かな食べ物を享受することに心が向かず、豊かな衣服の享受にも、乗り物の享受にも、豊かな五感の欲望の享受にも、心が向きませんでした。

大王よ、その長者家長は財産のために兄弟の一人息子の命を奪いました。その行為の報いによって、何百年、何千年、何十

万年ものあいだ、地獄で焼かれました。その行為の報いの残滓のために、彼は七たびの生で息子がなく、財産を王の蔵に入れました。

実に、大王よ、かの長者家長の以前の福德は尽き、新しい福德は積み上げられていません。大王よ、今、かの長者家長は大叫喚地獄で苦しめられています。」

王は師の言葉を聞いて、「尊師よ、何と罪深い行為でしょう。これだけの財産がありながら、自分で享受せず、あなたさまのようなブツダが近くの精舎におられるのに、福德を積まなかったとは」と言った。

師は、「まさに、大王よ、知恵の浅い人間というものは、財を得ても涅槃を求めません。財によって生じた執着は、彼らを長いあいだ苦しめます」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「355財は智慧浅き者を滅ぼす、彼岸を求める者たちはそうではない。財への執着ゆえに智慧浅き者は、他人の如く自己を殺す。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

355. Hananti bhogā dummedham, no ca pāragavesino; Bhogatanhāya dummedho, hanti aññeva attanam.

355. 諸々の財物は、思慮浅き者を打ち砕く。しかしながら、彼岸を探し求める者たちを〔打ち砕くことは〕ない。思慮浅き者は、財物にたいする渴愛〔の思い〕のために、他者たちを〔打ち砕く〕ようにして、自己を打ち砕く。

No.216 (2013年2月) 財産とは正しく使うもの 財物に対する執着は精神の病 Boon and bane of wealth.

355. Hananti bhogā dummedham, No ca pāragavesino; Bhogatanhāya dummedho, Hanti aññeva attanam.

355. 財物は心なき人損(そこな)えど 彼岸求む人損わず 心なき人財物に渴愛抱き敵(かたき)をば 損うごとく我れを損う  
訳: 江原通子

ハナンティ ボーガー ドウンメーダン ノー チャ パーラガヴェースィノー

Hananti bhogā dummedham, no ca pāragavesino;  
打ち砕く。 諸々の財物は、思慮浅き者を ない。しかしながら、彼岸を探し求める者たちを〔打ち砕くことは〕

Hananti/hanati:hanti(v.pr.3pl)[han]殺す,害す,破壊す,打つ bhogā/bhoga: ①(m.pl.nom)[bhuñjati]受用,富,財,財物,貨財,俸禄  
②[cf.bhuja ①]蝮局,とぐろ dummedham/dummedha(a.m.sg.acc)[du-medha,Skt.durme-dha]愚かな,暗愚の,浅はかな,無知の,愚癡の,  
智慧の乏しき, no/ ca/ pāragavesino=pāra/pāra(n.a)[ <para]彼岸,彼方,他の-gavesin 彼岸を求める+gavesino/gavesin(a.m.pl.nom)  
[gavesa-in]求める,探索する,追求する;

ボーガタンハーヤ ドウンメーダー ハンティ アンニエーフ アッタナン  
Bhogatanhāya dummedho, hanti aññeva attanam.

財物にたいする渴愛〔の思い〕のために、思慮浅き者は、打ち砕く。 他者たちを〔打ち砕く〕ようにして、自己を

Bhogatanhāya=Bhoga/bhoga: ①(m 依与)+tanhāya/ tanhā(f.sg.inst)[Sk.trṣṇā.cf.tasiṇā]渴愛,愛,愛欲  
dummedho/dummedha(a.m.sg.nom), hanti/hanati:hanti(v.pr.3sg)[han] aññeva=aññe/añña(a 代的 m.pl.acc)[Sk.anya]他の,異なる,余  
他の+iva/iva(indecl)[ // BSk.viya]如く=viya,va attanam/attan(m.sg.acc)[Sk.ātman]我,自己,我体.

Tiṇadosānīti imaṃ dhammadesanaṃ satthā paṇḍukambalasilāyaṃ viharanto anikuraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師が〔三十三天にいるサッカの〕薄紅色の毛氈のような石の座に滞在しておられたときに、アンクラについて語られたものである。

次のように述べられた物語は、「181 瞑想に励み賢く……」という詩句の註解で詳しく述べられた。そこでインダカ〔の過去世〕について、次のように述べられた。

彼はアヌルツダ長老が村の中に托鉢に入ったとき、匙一杯分の自分の食事を鉢食として布施した。それが彼の積んだ功德だった。アンクラが一万年のあいだ、十二ヨーjanaの竈の列を作って捧げた布施よりも、「インダカの果報はずっと大きな果報になった。それゆえ、このように言ったのである。

師は、「アンクラよ、布施というものは、わきまえて捧げるべきです。このように〔わきまえて捧げた布施は〕、良い畑に蒔かれた種のように大きな果報があります。ところが、あなたはそうにしませんでした。ですから、あなたの布施は大きな果報をもたらさなかったのです」と、この意味を明らかにしつつ、「捧げたものが大きな果報をもたらすところへ、わきまえて布施を捧げるべきだ。わきまえて布施を捧げ、布施した人々は天界に赴く。」「善く歩みし人(ブッダ)に称賛されるわきまえた布施を、ここ衆生の世界で布施に値する者たちがいるが、その人々に捧げられたならば大きな果報をもたらす、良い畑に蒔かれた種のように。」と、このように述べて、さらに法を解き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。

「356 畑にとって雑草は困りもの、この人々にとって執着は困りもの、それゆえ執着を離れた人々に、捧げられたものは大きな果報をもたらす。」「357 畑にとって雑草は困りもの、この人々にとって怒り憎しみは困りもの、それゆえ怒り憎しみを離れた人々に、捧げられたものは大きな果報をもたらす。」「358 畑にとって雑草は困りもの、この人々にとって迷妄は困りもの、それゆえ迷妄を離れた人々に、捧げられたものは大きな果報をもたらす。」「359 畑にとって雑草は困りもの、この人々にとって欲望は困りもの、それゆえ欲望を離れた人々に、捧げられたものは大きな果報をもたらす。」「

法話が終わったとき、アンクラとインダカは預流果を確実にものにした。大勢の人々にとっても、法語は意義深いものであった。

#### 執着の章の註解 終わり 第二十四章

356. Tiṇadosāni khettāni, rāgadosā ayam pajā; Tasmā hi vītarāgesu, dinnam hoti mahapphalam.

356. 雑草という汚点があるのが、諸々の田畑である。貪欲(貪)という汚点があるのが、この〔世の〕人々である。それゆえに、まさに、貪欲から離れた者たちにたいし施されたものは、大いなる果と成る。

No.217 (2013年3月) 与えるという行為 施しは修行の一部 Giving energizes the mind.

356. Tinadosāni khettāni, Rāgadosā ayam pajā; Tasmā hi vītarāgesu, Dinnam hoti mahapphalam.

357. Tinadosāni khettāni, Dosadosā ayam pajā; Tasmā hi vītarāgesu, Dinnam hoti mahapphalam.

358. Tinadosāni khettāni, Mohadosā ayam pajā; Tasmā hi vītarāgesu, Dinnam hoti mahapphalam.

359. Tinadosāni khettāni, Icchādosā ayam pajā; Tasmā hi vītarāgesu, Dinnam hoti mahapphalam.

356. 田草によりて田は穢れ 人貪(むさぼり)にけがさる 貪りはなれし人への施 大いなる果に報わるる

357. 田草によりて田は穢れ 人は瞋(いかり)にけがさる 瞋りはなれし人への施 大いなる果に報わるる

358. 田草によりて田は穢れ 人は痴(おろか)にけがさる 痴はなれし人への施 大いなる果に報わるる

359. 田草によりて田は穢れ 人欲求にけがさる 欲求はなれし人への施 大いなる果に報わるる 訳: 江原通子

ティナドーサーニ

ケッターニ

ラーガドーサー

アヤム

パジャー

Tiṇadosāni

khettāni,

rāgadosā

ayam

pajā;

雑草という汚点があるのが、

諸々の田畑である。

貪欲(貪)という汚点があるのが、この〔世の〕人々である。

Tiṇadosāni=tiṇa/tiṇa(n)[Sk.tṛṇa]草,茅草,禾本-dosa 雑草に荒されたる+dosāni/dosa : ①(m→n.pl.nom)[Sk.doṣa]過患,過失,欠点,病素②(m)[Sk.dveṣa]瞋,瞋恚 khettāni/khetta(n.pl.nom)[Sk.kṣetra]田,土地,刹土,国土, rāgadosā=rāga/rāga(m 有持)[ // cf.rajati]貪,貪欲,染;染色,色彩+dosā/dosa : ①(m→f.sg.nom) ayam/ima(指代 f.sg.nom)これ pajā/pajā(f.sg.nom)[Sk.prajā < pra-jan]人々;

タスマー

ヒ

ヴィータラーゲース

ディンナン

ホーティ

マハツパラン

Tasmā

hi

vītarāgesu,

dinnam

hoti

mahapphalam.

それゆえに、まさに、貪欲から離れた者たちにたいし 施されたものは、成る。 大いなる果と

Tasmā/tasmā(a 代的)[ta の abl]それより,彼より,それ故に←ta(人指示代ん n.sg.abl)彼,その,彼女 hi/hi(adv.conj)実に;何となれば tena hi 然らば vītarāgesu=vīta/vīta(a 有持) : ①[vi-ita < i の pp](a)離れたる,なき-rāga 離貪②(a)[vāyati vā ①,vināti vi の pp]織られた+rāgesu/rāga(m.pl.loc)[ // cf.rajati]貪,貪欲,染;染色,色, dinnam/dinna(a.n.sg.nom)[ // dadāti dā の pp]与えられたる,所与,所施 hoti/bhavati(v.pr.3sg)[bhū] 有る,存在する mahapphalam=maha/mahant(a 有 (持)大なる,偉大の+p/+phalam/phala : ①(n.sg.nom) [ // ]果,果実,結果②(m)切先,劍尖③(n)鞞丸こうがん④(m)[=pala]重さの量。

357. *Tiṇadosāni khetṭāni, dosadosā ayam pajā; Tasmā hi vītadosesu, dinnam hoti mahapphalam.*

357. 雑草という汚点あるのが、諸々の田畑である。憤怒(瞋)という汚点あるのが、この〔世の〕人々である。それゆえに、まさに、憤怒から離れた者たちにたいし施されたものは、大いなる果と成る。

ティナドーサーニ	ケッターニ	ドーサドサー	アヤン	パジャー
<i>Tiṇadosāni</i>	<i>khetṭāni,</i>	<b><i>dosadosā</i></b>	<i>ayam</i>	<i>pajā;</i>
雑草という汚点あるのが、	諸々の田畑である。	憤怒(瞋)という汚点あるのが、	この〔世の〕	人々である。

*Tiṇadosāni khetṭāni, dosadosā=dosa/dosa : ②(m 有持)[Sk.dveṣa]瞋,瞋恚+dosā/dosa : ①(m→f.sg.nom)[Sk.doṣa]過惡,過失,欠点,病素 *ayam pajā;**

タスマー	ヒ	ヴィータドーセース	ディンナン	ホーティ	マハツパラン
<i>Tasmā</i>	<i>hi</i>	<b><i>vītadosesu,</i></b>	<i>dinnam</i>	<i>hoti</i>	<i>mahapphalam.</i>
それゆえに、	まさに、	憤怒から離れた者たちにたいし	施されたものは、	成る。	大いなる果と

*Tasmā hi vītadosesu=vīta/vīta(a 有持) : ①[vi-ita<i の pp](a)離れたる,なき+dosesu/dosa : ②(m.pl.loc)[Sk.dveṣa]瞋,瞋恚, *dinnam hoti mahapphalam.**

358. *Tiṇadosāni khetṭāni, mohadosā ayam pajā; Tasmā hi vītamohesu, dinnam hoti mahapphalam.*

358. 雑草という汚点あるのが、諸々の田畑である。迷妄(痴)という汚点あるのが、この〔世の〕人々である。それゆえに、まさに、迷妄から離れた者たちにたいし施されたものは、大いなる果と成る。

ティナドーサーニ	ケッターニ	モーハドーサー	アヤン	パジャー
<i>Tiṇadosāni</i>	<i>khetṭāni,</i>	<b><i>mohadosā</i></b>	<i>ayam</i>	<i>pajā;</i>
雑草という汚点あるのが、	諸々の田畑である。	迷妄(痴)という汚点あるのが、	この〔世の〕	人々である。

*Tiṇadosāni khetṭāni, mohadosā=moha/moha(m)[Sk.moha,mogha]痴,愚痴+dosā/ dosa : ①(m→f.sg.nom)[Sk.doṣa]過惡,過失,欠点,病素 *ayam pajā;**

タスマー	ヒ	ヴィータモーヘース	ディンナン	ホーティ	マハツパラン
<i>Tasmā</i>	<i>hi</i>	<b><i>vītamohesu,</i></b>	<i>dinnam</i>	<i>hoti</i>	<i>mahapphalam.</i>
それゆえに、	まさに、	迷妄から離れた者たちにたいし	施されたものは、	成る。	大いなる果と

*Tasmā hi vītamohesu=vīta/vīta(a 有持) : ①[vi-ita<i の pp](a)離れたる,なき+mohesu/moha(m.pl.loc)[Sk.moha,mogha]痴,愚痴, *dinnam hoti mahapphalam.**

359. (*Tiṇadosāni khetṭāni, icchādosā ayam pajā; Tasmā hi vigaticchesu, dinnam hoti mahapphalam.*) [( ) *videsapotthakesu natthi, atṭhakathāyampi na dissati]* *Tiṇadosāni khetṭāni, taṇhādosā ayam pajā; Tasmā hi vītanāhesu, dinnam hoti mahapphalam. Taṇhāvaggo catuvīsatiṃ niṭṭhito.*

359. 雑草という汚点あるのが、諸々の田畑である。欲求という汚点あるのが、この〔世の〕人々である。それゆえに、まさに、欲求から離れた者たちにたいし施されたものは、大いなる果と成る。  
渴愛の章が第二十四となり、〔以上で〕終了した。

ティナドーサーニ	ケッターニ	イッチャードーサー	アヤン	パジャー
<i>Tiṇadosāni</i>	<i>khetṭāni,</i>	<b><i>icchādosā</i></b>	<i>ayam</i>	<i>pajā;</i>
雑草という汚点あるのが、	諸々の田畑である。	欲求という汚点あるのが、	この〔世の〕	人々である。

*Tiṇadosāni khetṭāni, icchādosā=icchā/icchā(f)[ ㄥ < icchati]欲求,希求+dosā/ dosa : ①(m→f.sg.nom)[Sk.doṣa]過惡,過失,欠点,病素 *ayam pajā;**

タスマー	ヒ	ヴィガティッチェース	ディンナン	ホーティ	マハツパラン
<i>Tasmā</i>	<i>hi</i>	<b><i>vigaticchesu,</i></b>	<i>dinnam</i>	<i>hoti</i>	<i>mahapphalam.</i>
それゆえに、	まさに、	欲求から離れた者たちにたいし	施されたものは、	成る。	大いなる果と

*Tasmā hi vigaticchesu=vigata/vigata(a 有持)[vigacchati : pp]去れる,離去の,消失せる←vigacchati(v)[vi-gacchati < gam]去る,消失する,減少する+icchesu/icchā(f→m.pl.loc)[ ㄥ < icchati]欲求,希求, *dinnam hoti mahapphalam.**

*Taṇhāvaggo catuvīsatiṃ niṭṭhito.*